リステラス星圏史略
古資料ファイル
８－１
『ＬＯＮＧ ＷＡＹ ＨＯＭＥ』

※「男性同性恋愛」成分含有。
アレルギーあるかた注意。※
（発掘整理一旦完了）

霧樹里守 is 土岐真扉

GOING MY WAY

（ホーミング・ロード）
（１９９５）

（「ネタばれ」注意…（＾＾；）…
数十年、待ちたい。というかたは、
本編の出版時点まで、お待ち下さい…ｗ）

ホーミング・ロード（仮題）シリーズ　（**1995/11/08**）

（1995/11/08）

ホーミング・ロード（仮題）シリーズ

※やおいネタ（リクエスト？した栗本さんが悪いのよ★）
　ダイジェスト・バージョン

文責・土岐（書かせたのは栗本だってば）真扉（まさと）。

☆とか言いつつ設定の説明☆（読まなくていいぞ）

　とある未来。どのくらい先かと言うと、

・某 杉谷好一 がひとりで地球滅亡を演出し、
・崩壊しまくった人類文明が必死こいて千数百年をかけて復活をとげ、
・地球が統一されてメデタイな、とか思っていたら、

・謎（？）の異星文明リスタルラーナと
・ファースト・コンタクト（第一種接近遭遇）してしまい、

・ドサマギで生まれた美（？）少女サキ・ランが
・宇宙を股にかけた（かどうかはともかく）スペオペしまくったあげくに、

・勝手に成仏してついでに転生し、
・時をかける少女になったり
・女神サマに成り上がったりしている暇に

・世間サマの歴史はそれとは無関係に勝手に進行し、

・一度は市民権を得たはずの〈ＥＳＰ〉（超能力者）が、
・やっぱりパンピー（一般人）のコムプレックスを刺激するからという理由で
・迫害されたりして、

・遺伝子レベルで出産制限を受けたりするようになり、

・その為のチェック技術の普及と、
・たまたま同時進行で人工子宮による代理出産が普及し過ぎてしまい、

・その間にテラザニア（地球系開拓惑星連邦）と
・リスタルラーナ（麗天地星間連盟）は、
・世にも歴史的な統合を遂げたりして、
・平和ボケと文化文明の爛熟期を享受している一方で、

・ゼネッタ（超能力者）と
・ジースト（非能力者）が
・民族紛争を繰り返し続けているジレイシャ（星間帝国）は
・発展を遂げ損ねて、やがては衰亡の果てに
・《リステラス》に吸収合併されるしかないのかなぁと、
・思われつつ

・第四の異星文明の出現で
・政治的均衡が微妙に変化して緊張化しちゃったりしつつ、

・とりあえず《リステラス》行政圏内では
・遺伝子管理による身分階級制度（の、ようなもの）が
・成立しそうでいて、まだ確定したものではなかった、

そんな過渡期な時代。

（だぁから、読まなくていいって言ったっしょ？）

（参照したければ資料）
↓
http://85358.diarynote.jp/201703102036555117/
『ホーミング・ロード（仮題）シリーズ』　とか言いつつ設定の説明…（読まなくていいぞ）…。

2017年3月10日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

第一部・「イレギュラーズ」
（大粗筋）
（1995.11.08.）

（「ネタばれ」注意…（＾＾；）…
数十年、待ちたい。というかたは、
本編の出版時点まで、お待ち下さい…ｗ）

（1995/11/08）

第一部 ・ イレギュラーズ （はみだし部隊）

（だって…この話まだ当分書く予定なかったから、
　細部は全然ツメてないんだもん★）

☆　大 粗 筋　☆

ゴツクて背の高い、その男の略称はといえば、リエン・ドレングスン。
正式（登録）名称は、リーエンタール・ブレイヴ＝ドレングスン。

そこまでは、非凡（※「有名な冒険家の名前」・「勇士」＝「戦士の息子」という意味）ではあれ普通だが、

通称ときたら、【 宇宙最強 】の生身男（なまみおとこ）と、広く銀河に知れ渡っているという…

その由来というのが、すでに第何次になるのかも記録係以外は数えていられないという毎度の、対《ジレイシャ》（帝国）国境紛争の、

ところがギッチョン、第四の異星文明圏《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）の参入によって思わぬ苦戦を強いられた先の大攻勢で、

どこも改造していない素（ただ）の人間のくせして前人未踏の出撃記録（肉弾戦部隊の所属だった）を樹立しまくった戦果による…のだが。

その度重なる功績により一兵卒から准将の位にまで登りつめたはずの伝説の男が、

なぜこんな、新規に編成されるらしい正体不明のイレギュラーズ（不正規部隊）の、

集合場所に指定された食堂兼ミーティング・ルームで膝をかかえて不貞腐れているかと言うと、

彼にそこまで無茶な出撃を繰り返させる元凶になった、紛争当時の総指揮官を、

こともあろうに戦勝祝賀会に先立って執り行われた彼自身の准将任命式の、全《リステラス》（天地）に本番生放送の席上で、

思いっきり、殴り飛ばして再起不能にしてやったから……

なのだが。

彼自身にしてみれば責任ばかりが重い准将なんて地位に興味も未練もあった訳ではなく、無能な指揮官への怒りの一撃を、絶好の機会が到来するまで顔にも態度にも出さずに殊勝に待ち構えていた辺り、

どう考えても「昇格拒否をも計算に入れたうえでの計画的犯行」と、かれを知る者は一様に声を揃えて断言している訳で…。

いま現在の彼の不機嫌の原因と言えば、

優秀（？）な軍人らしく時間に正確な彼よりさらに早く、
この場に到着して奥まった壁際に席を占めていた、

とても軍人向きの遺伝子の保持者とは思えない、一人のヤサオトコ（優男）の存在のせいだった。

「ああいうのはすぐに死ぬな」

という直観的結論が、不快…というか不安で落ち着かない気持ちの、具体的な内容である。

ダテに最前線で５年もの間、通信機器も使えないような悪条件下を自力で生き抜いてきた訳ではない。

そのぐらいの判断は悲しいかな、一目でついてしまうのだった。

今度の非正規部隊の編制（しかも極秘裏らしい）が何の目的かは知らないが、元准将候補だったコネと権限で一足先に入手した隊員リストを一見した限りでは、他のメンツは彼に負けず劣らず先の紛争で戦果と異名を勝ち取ってきた、それなりのモサ連ばかりである。

どう年齢を割り増してみても基本教練を終えたばかりの新兵…としか見えない若輩者が、ひとり紛れ込んでいるというのは、あまりにも場違いだった。

それも、本来は高級官僚候補の遺伝子保持者でありながら、机仕事はキライだとほざいてドロップアウトを決め込んで軍学校に再編入したという変わりダネの彼（リエン）自身と同じく、別の目的で組み立てられた遺伝子構成の持ち主としか思えない。

特例的に軍人向きの体格に育った（計算外に育ち過ぎた…おとなしく官僚になっていたら、さぞ周囲から浮いていたことだろう）彼とは異なり、なんと表現したらいいのか…

華奢というか、繊細なのである。

まさか指導者（学者）階級である《銀》系がこんなとｋろで新兵をやっている筈もないから、芸術血統か、モデル／アクター（表現素材）系か…？

そんな、およそ軍務には似つかわしくない、線の細い整った横顔の主が、それでいて気後れしている風もなく、集合時間を迎えて続々と集まってくる、どこかに返り血の臭いを漂わせている物騒な男達を、ノホホンとした表情で眺めている。

それを不躾に観察しているリエンの方へも、キツイ視線が気になるのか、時折、チラと横目を投げてくる。

…それでも一向に目をそらそうとしない彼の行儀の悪さに、しまいに諦めたのか、思いがけず人の悪そうな表情でもってニッコリキッパリ笑い返して見せると、その後はまったく無視しきる、という高等戦略に切り替えたようだった。

「……しょーがねぇなぁ……」

と、彼、リエン・ドレングスンはその瞬間に、思ったわけである。

とりあえず自分に出来る範囲内で、このプライドの高さの割に肉体的にか弱そうな男を、かばってやろう。

ついでに言えば、なるべく早くに、この得体の知れないイレギュラーズ部隊からは「不適任」という事で、追い出してやるのが親切というものだろう…と。

やがて当面の部隊長代理だと名乗る年配の男が現われて、「新設部隊の緊密なチームワークを築くため」とやらの目的で、一ヶ月間の再教練を、一斉のブーイングを始めた歴戦のモサどもを相手に、云い渡したものだった。

（…あら…なんか全然、『ダイジェスト』になっていませんわね…★
　なにせこのシーン、というか『第一部』の全体は、ある夜の夢で全編通しで観ちゃったシロモノで、（んだから正確な意味での『小説』ではないわけね）、とりわけ冒頭の出会いの情景は、思い入れが深かったりして…。

　ちゃんと『小説』にして書く時には、もちろん、もっと分かりやすい文章を心がける、つもりではあるけどさ★）

（参照したければ資料）
　　↓
http://85358.diarynote.jp/201703102101239703/
第一部 ・ イレギュラーズ （はみだし部隊）　（1995/11/08）
2017年3月10日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

　その一か月の実戦さながらにハードな教練で、無敵の体力男（一応、頭脳も性格も顔も、「かなり」よい！）（…と注釈を入れろと、相方から注文が入った…）リエンと、華奢な優男のクセに得体の知れない芯の強さ（と、教官たちの意味不明な手加減）でスレスレながら合格点を自力で弾きだした青年が、なんとなくホノボノした関係を築いてしまった過程については、省略。

　一か月後、その「謎の落ちこぼれ」が、訓練のキツさに精魂尽き果てるよーな凄絶に色っぽいヤツレ顔…（もちろん、「そのテ」のゴタゴタからはリエンが護ってあげてたんだよん）…のウラで、こっそりチェックしていた挙動不審な隊員たち数名が、実は《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）に染まったスパイだったゾ、という、逮捕騒動の後。

「落ちこぼれ」は、実はホンマモンの《銀》種（指導者階級）の一族だった！

という、一大センセーションで部隊中がどよめいたのだった。

　肌を褐色に染め、艶やかな黒髪を赤茶けたドレッドヘア（その時代にそんなんあるのか？）に変えていた「優男」が、変装を解いた姿で現れると、

……隊員一同、無言の悲鳴というか絶句状態。

「…美形だーーーーっ！」というのも、さる事ながら、これほどの有名人と一か月も寝食を共にしていたなんて、誰一人、思ってもみなかった訳である。

（もちろんリエンも例外ではない…というか、最も愕然としたのが彼だろう…）

（現代の政治家に喩えようとするとアリガタミがなくなっちゃうんで…例をあげるなら…かの、「孔明」サンを、それと知らずにドツイたり頭なでたりしてたと気がついた時の一農兵のショック…って言ったら、共感できる？）

　《銀種》または《特Ａ級》と呼ばれる遺伝子等級の中では少数派の（実はサキ・ランの子孫つまりアルヤさんの直系とかだったりするらしい）、東洋風の外見（長髪のジョン・ローンと思いねぇ）を持ち、寿命が長い分、実年齢よりずいぶん若く見える彼の通称は、リュウ・ウェイファン博士。

（正式登録名称は、ウェイファン・ルー＝リュアン。ルーの音に象形文字では「路」または「蕗」を当てるのと、古代語の一種で「ｗａｙ」は「道」である事から、後に相思相愛になったリエンが「Ｍｙ Ｗａｙ」と呼ぶようになった…ことから、このシリーズのタイトルがついている…余談だ★）

「ウェイ博士」は、リステラス文明圏でも屈指の、有能な行政家で、科学者でもあり、幼い頃にテロで一族を失っているという経歴で世間の同情を引いてもおり、とにかく超絶美形の猫かぶりで画面写りが良いので、とりあえず何も特別な話題がなくても折にふれてマスコミが取材をかけるというタレント議員？でもあり…

　つまるところ、「　天上人　」なんだな、一般人からすれば。

　一か月の間に保護欲（だけか？オイ）をかき立てられまくっていたリエンが、いくら最高司令官（それでも遺伝子はＢ級）を公の場で殴れるよーな階級意識の薄い奴とは言え、このあまりにも歴然とした「身分違い」に、ものすごーい、激甚なショックを受けて、実は内心では立ち直るまでに数日を要してしまったというのは、言うまでもない。

　…が、任務とプライドが最優先の軍人なもので、その場では一番最初に脳みそ入れ替えたような顔をして、「理由をお伺いしたい」とか何とか、イキナリ敬語に使い分けて、騒ぐ部下一同をしりめに議事進行を仕切ってしまったわけだ…。

　《特Ａ》の遺伝子保持者であるウェイ博士は人工子宮の中にいる時から英才／帝王教育（ある意味では洗脳）を受け、リステラスの機密事項のほとんどを把握しており、情報源としても人質としても超スペシャルなＶＩＰなので、本来なら警戒厳重な《首都惑星》か《学究都市》から、一歩も出ることなく生涯を終える…筈である。

　が、彼は、常に公共性を心がけ、司政管としての任務を最優先に考えなければならない立場でありながら…、

　幼い頃に殺された両親・姉妹のための「復讐」という衝動を、どうしても抑えることが出来なかったのだった…。

　なんて事を、本人がバカ正直に説明した訳ではもちろんないが、《特Ａ》自らが危険を冒して、とある作戦の陣頭指揮を執る…という計画を打ち明けられたときに、ミーティング・ルームに

集合していた隊員一同は、即座に、過去のテロ事件との因果関係を納得していたのだった。

　で、今回招集されたイレギュラーズ（不正規部隊）は、要するに彼一人を補佐する為の、特別護衛任務の為の臨時のものである、と。

　美しすぎる天上人の、涙をそそ（辱）ぐための手伝いとあれば、日頃の行状に問題ありまくりだった前線帰りのモサどもと言えど否やのある筈はなく…

　当然のごとく副隊長の座をせしめたリエンを筆頭に、隊長であるウェイファンの手足となって、極秘（諜報）任務にと取り組んだのだった。

　リエン達の敵組織の名前は《ガワンナラ》。

　法律上は一般の複合企業のような顔をしているが、事実上は「死の商人」。

　私兵団を擁し、敵国である《ジレイシャ》（星間帝国）に半ば公然と兵器を密輸し、最近では《ジャヌアーラ》（邪樹神教）とも闇取引があるという…、

　表向きは統一されている筈の《リステラス》（天地）の中にあって、「もう一つの国家」と呼ぶ者さえある、巨大な組織…。

　その幾つかある所有恒星系の中から本拠地を割り出すという情報戦を展開する一方で、司政管の一人であるウェイのもとには通常の、どうしても他人任せには出来ない決裁書類やなにかが追いかけても来るしで、星から星へと転々としているうちに、

　もと「高級官僚候補」としての教育を途中まで受けていたリエンは必然的に秘書としての役割も兼ねるようになり、遊撃部隊として指令を受けては出かけては戻ってきては、また出るという連中とは別格の、２４時間はりつきの護衛兼秘書兼話し相手兼…という立場になっている。

　ここで常人だったら「密室の色恋い沙汰」にもつれこんで、さぞかしウェイをうんざりさせた事だろうが、リエンは理性の人なので…というより、本当にウェイがものすごい重責に耐えた上で、自分のワガママを押し通すべく努力をしているのがよく視える立場にいるので、恋愛感情というよりは尊敬というか崇拝…に近い、保護欲と親愛の情のほうが、はるかに勝ってきている。

（それに、基本的かつ本質的にはウェイファン博士は「人間ギライ」のケがある、というのは、しばらく付き合っていれば誰にでも判ることだし。）

　そんな多忙でギリギリの毎日の合間に、さらに無理を押して別の任務を掛け持ちしろという指令が《首都惑星》から来た…らしい。

　変装を解いた姿で、単独で出かけようとするウェイ博士を、詳細を知らされない（信用されていないのではなく、珍しくウェイが話したがらない）ままのリエンは、しかし危険を冒させるわけには行かないと、強引に護衛して送っていった。

　明け方まで、とある超高級ホテルの前の指定された場所に、車を停めて待つこと数時間…。

　個人的には全然まったく気が進まないという顔で出かけていったウェイ博士は、あきらかに濃厚な情事の後…という気配をにじませて、気絶寸前に疲れきって戻って来たのだった。

（あー、やっとジュネ編になってきた…★）

（参照したければ資料）
　　↓
http://85358.diarynote.jp/201703152026185804/
（先週の続き・１）。　（「ネタばれ」注意…（＾＾；）…数十年、待ちたい。というかたは、本編の出版時点まで、お待ち下さい…ｗ）
2017年3月15日 リステラス星圏史略　（創作）

http://85358.diarynote.jp/201703152056055377/
（先週の続き・２）。　（「ネタばれ」注意…（＾＾；）…数十年、待ちたい。というかたは、本編の出版時点まで、お待ち下さい…ｗ）
2017年3月15日 リステラス星圏史略　（創作）

　そんな事が何度か繰り返し起こり、「きっと何か事情があるのだろう…」と気遣う余りに何も訊けず、喜んでそうしているとは思えない行為に、「自分には救うことが出来ないのか？」と胸を痛めて悶々とするリエンと、一方で、「きっと軽蔑されてるっ！」と思いこんで、ギクシャクとグレまくって、ヤケになっていくウェイと。

　ある日の密会の相手が、過度にサディスティックな傾向のある困った奴だった。耐えきれず悲鳴をあげて失神するウェイ。ホテルの防音壁（と数十階分の距離）を隔てて、悲鳴が物理的に聴こえた筈はないのにドアぶち破って飛びこんできたリエン。

　泣きくれているウェイをなだめているうちに、ようやく聞き出したのは、《リステラス》（天地）行政機構における機密中の機密…支配階級である《銀種》の遺伝子には、しばしば、一般には「禁断の能力」として忌み嫌われ根絶させられた筈の、強度のＥＳＰ因子が付与されているという事。

　ウェイの場合は、それは接触テレパスという形で現われており、不幸な事には性的な深い接触を伴わない限り発動しないという事。しかし、国の安全を左右するような情報を、どうしても入手しなければならない場合、執政官として教育された自分には、嫌いな相手とのそうした接触を、拒否しようという発想の自由がないという事…等々。

　なんのことはない、この時点でウェイの方は、かなり明確に「リエンにどう思われるか」が気になって仕方がなく、意識しすぎているせいで、それまでは当たり前に（軽度の人間不信の原因になっているとは言え）こなしてきた「特殊任務」が、辛く感じられているだけだったんだが…。

　ここで更に、ＥＳＰの中でも最も忌み嫌われるテレパシスト（読心能力者）であると知られる事で、リエンに嫌悪されるのではと、それが一番の恐怖で。…ヤケとパニックで自暴自棄になり、体調を崩して寝込んでしまうウェイ…。

　その心理をきちんと理解できた訳ではない（「惚れられてる」なんて自惚れられるほど身分の違いは小さくない。なにしろ平均寿命にしてからが、異なる遺伝子等級間では倍近い差が、歴然とあったりする）…なりに、深く傷ついているらしいウェイを何とかして救いたい…と思いついたリエンは、「そう考えている自分の心が、嘘じゃないということを解ってもらいたいから」という理由で、「俺の心を読んで下さい」と、…つまりは、「抱かせて下さい。」と、「お願い」しちゃうのだった…。

（…冷静に考えるとギャグだな…）

　恐る恐る、抱きしめられてみた臆病もののウェイと、本心から愛しみ慈しんだ優しいリエンと。結果、うまくいっちゃった訳で、それからほどなくして問題の別件任務も片づき、短いけれど思いきし大甘だった蜜月期間を経て…さぁいよいよ、《ガワンナラ》の、本拠地攻略戦である。

　この間、戦略はウェイが組み立てて政府と軍部の全体を仕切って動かし、戦術はリエンが担当して具体的な作戦を練り上げ、指揮官と部隊員を指名し。数個大体を投入しての、国内で展開するものとしては異例の大規模な行動となった。

　《ガワンナラ》所有の私兵軍基地の数カ所を同時に叩く一方で、本拠地にはウェイファン博士みずからが護衛の一隊（もちろんリエンも）を率いて乗り込む覚悟である。

　で、…乗り込むのは比較的簡単だが、問題は基地の自爆コマンドを発動させた後の、撤退方法で。

「考えがあるから任せてほしい」とか偉そうに断言して当日まで具体策を白状しなかったウェイファン博士は、実は急襲部隊の全機に対して、一定時間が過ぎたら惑星重力圏を離脱するように、あらかじめ強制プログラムを組んでいた。

「全員が離脱した後で、一人が残って自爆プログラムを入力すれば、それで済む話なんだよ」と。

　焦るリエンにニッコリ極上の笑顔で笑いかけるなり、その手首を手錠でガチャンと機内につなぎ、自分はヘロリと惑星上へ飛び出てしまう。

　いわく、公人としての立場も責任も、周囲への負担も迷惑も、何もかも承知した上でなお、「復讐」という醜い感情を抑制できなかった、そんな自分が許せないから、この計画を考えた当初から、最後は自分ひとりの手でケリをつけようと、心に決めていたからと。

　走り去る博士の後ろ姿に、なすすべもなく呼びかけるリエン。

　ドアを閉じて離陸しようとするヘリ。

　残る片手で銃を抜いたリエンは、ためらいもなく繋がれた片手を灼き切り、博士を追いかけて

基地の内部へと走った。

　で…。

　最愛のリエンを巻き添えで殺したり出来なかったウェイファンとしては、頭脳の限りを尽くして、自壊しようとする惑星上から脱出路を切り開くしかなかった、わけだ。

　その後、失った手首のかわりに機械の腕をつけたリエンは、単なる「宇宙最強」と周囲から呼ばれるようになり。

　余計なことに手を出したせいで研究活動が大幅に遅滞していたウェイファン博士は、リエンの退院を待つ暇もなく、首に縄つけられて《学究都市》へ連行されてしまった。

（Ａ級以下は立入禁止という区域なんだな★これが）

Ｑ．あなたは、この話の「続き」が読みたいですか？
　　それとも、もっと「詳細な描写」が、読みたいですか？？

（参照したければ資料）
　　↓
http://85358.diarynote.jp/201703161400339231/
http://85358.diarynote.jp/201703161414264484/

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2017年3月16日14:20

↑

ちなみにここまでのストーリーは全て、

「幽体離脱？した私（？）の視点」が、

「リエンの肩に乗っかってる」形で、

一晩でぜんぶ（それこそ「走馬灯のように」）観ちゃったのでございました…

ｗ（＾＾；）ｗ…☆

第一部・最終章
「 日暮れて 道遠し 」
（1995.11.18.）

（「ネタばれ」注意…（＾＾；）…
数十年、待ちたい。というかたは、
本編の出版時点まで、お待ち下さい…ｗ）

（1995/11/18）

ホーミング・ロード（仮題）シリーズ

第一部・最終章　「日暮れて道遠し」

「敵を欺くにはまず味方から」と、ウェイファン博士はニッコリ笑って言ったのだった。

惑星基地を攻略後、惑星破壊装置を作動させて後の、脱出経路についてである。

起動したが最後、その指示を入力した者には生還の可能性が皆無であると、信じられているからこその自爆用〈最終兵器〉である。

生きて帰るつもりの敵に気軽に侵入されて、簡単にスイッチを押されてしまうと判っていたら、そんな危ないシロモノをわざわざ設置しようという物好きなど、いないに違いない。

従って、そこへ至るルートには、通常なら警戒システムの配置も甘い。

だからこそ少人数で短時間に攻撃を仕掛けて、生還する可能性も出てくる訳で。目的はそれだと守備する側に知られてしまっては、潜入するのが困難になる。

「だからこそ、方法は解明しましたが、この場ではお教えできません。当日は、すべて私の指示に従って、全軍に速やかに動いてほしいのです」

ウェイ博士が成功を保証するからには如何なる困難事であろうと不可能な筈などないと、その会議に居合わせた誰もが信じていたし、それはまた実績に裏打ちされた事実であるし。

疑義をさしはさもうと思う者が万一あったとしても、あの笑顔でニッコリと、自信ありげに断言されては……、逆らえるわけがない。

「さすが隊長、天才っ！」と、内心で拍手までしてしまったベタ惚れの恋人は、そんな自分の判断の甘さを、後になって深く悔いることになった。

☆　★

　かくて全軍は一斉に行動を開始した。

「本当に、ご自分で陣頭に立って、指揮をとられるおつもりですか？」

「いくら僕が天才と言ってもね。前線まで出ない事には、細かい的確な指示っていうのは、出せないだろうと思うよ？」

　心配して引き留める部下と、そらとぼける上官の会話は、はたで聞かされている者たちにとっては、すでに単なる痴話ゲンカの領域だった。

　なにしろ《ガワンナラ》（私掠兵団）本拠地である惑星要塞へと降下途中の強襲揚陸艇のなかでの、いまさらな会話である。

「もうここまで来ては内通者の危惧もないでしょう。我々を信じて、作戦を教えて頂くわけには、」

「無能な指揮官だっ！とか言われて、後で殴られたりしたら、この美貌が壊れてしまうしねぇ？」

　しつこく言い募るリエンの言葉などハナから無視する構えで、つい楽しげに茶々など入れてしまうウェイである。

　その上に、

「准将閣下に、またも自主降格する口実を与えたりしたら、僕が軍上層部から恨みを買っちゃうしぃ」

　と、わざわざつけ加える意地の悪さでは、所詮リエンに勝ち目がある筈もない。

「〜〜〜〜っ！」

　絶句して拳を握りしめたりしている長身の副長を見上げて、

「平気。心配ないよ」

　いつもの口癖を持ち出して真っすぐに瞳をのぞきこんだウェイファンは、極上の笑顔でもって優しくささやいた。

「…だって、きみも一緒だろ…？」

　そんな言葉で、つい気を許して、顔面が崩れかけてしまうあたり。

（…この副長は、もう本当に…）と、隊員一同の無言の嘆息の嵐が背後で吹き荒れていた事など、本人の知ったことではない。

　そして。

　やはりウェイファンは、性格が悪いのだ。

☆　★

「……隊長？」

　かすかな胸騒ぎを覚えた副長が遠慮がちに声をかけようとしたのは作戦行動も佳境に入ろうかという頃だった。

　すでに惑星全土の制空権は手中にしており、各所に揺動作戦をも含む幾十もの部隊が散った。予断は許さないと言うものの、今のところ全ては順調であり、戦略も戦術指揮も的確そのものだった。

　にも関わらずリエンは唐突に、自分が感じ始めている極度の不安と緊張は通常の作戦時のそれではないと、自覚したのである。

　…「むしのしらせ」（予感能力）。遺伝子工学の賜物の。

それは、リエンの大切なウェイファンに関わるもの。

彼だけに関わる……　深刻な不安。

「隊長」

声がかすれる。喉がふるえ、唇が動かない。

振り向くことのない恋人から、なぜだか冷酷に別れを告げられているような気が……する。

謝罪の感情が聴こえる。　……なぜだ？

ルー・ウェイファン隊長は、それどころでなく多忙を極めているのに。

「よーし、いいぞ！」

人質となっていた民間人やその他の救出、降伏してくる構成員の逮捕と輸送、なお続いている掃討戦への増援の指令、エトセトラの、情報収集と指示を一手に引き受けていた前線総指揮官が。

ある一瞬、ふぃとヘッドセットを外し、瞑目したのである。

「降下」

と、短く彼は言った。

「この隊は３分以内にアウェナ大陸ＤＦ３３１ポイントに着陸。これより惑星自爆作戦を始動する」

正念場である。自分でもうまく説明できないような妄想について説明していられるような場合では、ない。

リエンはぐいと拳を握り、己を奮い立たせた。

何があっても、どんなものからでも、隊長は俺が守ると。

しかし……。

☆　★

（参照したければ資料）

↓

http://85358.diarynote.jp/201703161524497587/

ホーミング・ロード（仮題）シリーズ： 第一部・最終章　「日暮れて道遠し」。（１）　（※【男性 同性 恋愛 】ものにアレルギーのあるかた注意★）

2017年3月16日 リステラス星圏史略　（創作）

☆　★

俺は負けない。隊長を守る。たとえ、どんなものからでも。

けれど…。

為すすべもなく走りさる後ろ姿を見送った。

ひび割れた声が、悲鳴のように幾度もいくたびもウェイファンを呼んでいる。

その叫びのぬしが自分自身であるという事すら、すでにリエンは意識していなかった。

ウェイファン自身が彼本人を殺したいと、それが絶対の望みだと。生きているのは…辛いと。

どうすれば。

いったい、俺は、どうすれば。

「〜〜〜〜っ！」

戦士の喉からもれた怒号はことばをなしてはいなかった。

何を憎み、何と戦い、誰を守ればいいと言うのか。

……誰を、誰から？

甘い言葉に酔いしれ、最愛の相手をお手軽に救ってあげられた気分になって。

……なにひとつ。

自分が許せない。けれどもっと、こんな仕打ちのできる、恋しい相手が許せない。

「…なめんな…っ！」

彼は右手で銃を抜き、〈切断〉にセットするなり、ためらいもなく己の左腕に向けた。

スパリと、透過した光線が艇の内壁に突き当たって焦げた音をたてる。

ごとりと何かが床に落ちて響いたが、そんなものを顧みている暇は、彼にあるはずもなかった。

☆　★

艇のドアを灼き切り蹴りやぶり。すでにかなりの高度となっているのを構いもせず跳び降りた。

着地し転がり受け身をとるが、衝撃を受けとめた肩の骨が外れたらしい。

どのみち左腕はすでに戦闘力を持たず、動くのに不都合はないさと気にもとめず走り始めた。

自爆装置の内壁が降りきってしまう前に、彼に追いつかなければならない。

何も出来ないのなら、彼を救えないのなら。

彼が、自分は勝手にやるからと宣言したあとなのだから。

俺も勝手に、やらせてもらおうじゃぁないか。

基地の通廊のあちこちに敵兵の死骸が転がっている。

では、まだ、彼は無事だ。

だてに俺が鍛えてあげたわけじゃない。

Ａランクのくせに、頭脳労働タイプのくせに、一級の戦士とはりあう反射神経がある…。

先に駆け抜けた侵入者を追う、増援の一軍に追いついた。

彼の邪魔をしようという者になど情けをかける気は毛頭ない。

手榴弾を最大爆圧にセットする。自分にも被害が出ることが、何だと言うのだ？

とにかく…、

シャッターが降りてしまう前に。

共に。

…なにも出来ないのなら、せめて…

☆　★

巨大な空間に据えられた虚仮威しのように複雑げな機械の前の、あきれるほど簡単な入力装置の前に、白煙に紛れるようにして青年は立っていた。

今の彼に出来る限りで気配を殺して部屋へ這い込んだリエンを、敵兵の残党だと思ったのか振り返ることもせず、パネルの上で忙しく指を走らせながら、

「もう遅いよ」

と、静かに言った。

「この惑星は自壊する。向こう百年、生物の棲めない星になる。…きみも可能性のあるうちに逃げたまえ。あと十秒で、そこのシャッターは完全に閉まるから」

　そうか。では、あと少し。

　よろよろと、やっとの思いで立ち上がり、

　かすむ目でおぼろな目標をとらえて歩み寄ろうとする戦士を……

　ふと、彼は振り向いた。

「〜〜〜〜ッ、リエンっ！」

　悲鳴。立ちすくむ、黒髪。

　してやったりと、すでに瀕死のていたらくの男は、精いっぱいの力でニヤリと、嘲ってみせた……つもりだった。

　実際には傷だらけになった顔が、ただギクシャクと歪んだきりだったけれども。

「…なんで…逃げない…」

　シャッターが降りきりロックがかかる、がしゃんと重たい機械の音がする。

　焦げた死体と白煙と血の臭い。

　散乱した肉片。

　そんなものは気にならない。

　これで最後まで、二人きりだから。

　最期まで俺のものだから。

「……護衛なしで……」

「…一人で外出しちゃ…い…けません…と…、何度も…。

　俺はっ、…言いました…よ、ね…？」

「…っの！　大ばかやろう……っ！」

「そりゃあ、あなたに比べれば、誰だって劣等遺伝子ですよ……」

　リエンは笑った。笑ったままずるりと崩れ落ちた。

　愛しい恋人の、さしのべられた腕の中に。

☆　★

「…あなたの言った通りです…」

「喋るな。いま、止血する。」

「無駄ですよ？　それより、こうやって抱いてて貰えませんか」

「うるさい。逆らうな。邪魔だから、しがみつくんじゃない！」

「だって気持ちがいい…」

　うっとりと目をとじる。黒髪の告死天使が優しく誘っている。

「ああ、それで」と、寝言のようにリエンは呟いた。

「ランクづけ（遺伝子等級）の話。あれ、あなたの言った通りですよねぇ…。人間、事故だのテロだので、いつ死ぬか判らないんだし…。

　平均寿命なんてものは、自殺したがるような人間を相手に気にしてたってしようがないですよね。ほんと。

　だから、俺は…。

　ねぇ、ウェイ。　…聞いてます？

　最後ですから、どうしても、一言だけ、言わせてほしいんですけど…」

「聞いてないっ！」

　叩きつけるように、ウェイファンは叫んだ。

　おまけと言わんばかりに瀕死の重傷者の血まみれの横つらを、音たてて張りとばす。

「なんでこんな真似をしたんだっ！…手を離せってばっ！」

「…だって俺、ひとりで生きるのって、嫌でしたから。

　あなたを一人で逝かせるのも。

　それで…」

　言いたいのに。言わなくちゃいけない言葉が、あるのに。

　かすれていく意識のなかで腕の力が抜けた。

　結局、先にここで死んでしまうとなると、誰がウェイファンの最期をみとるのだろう？

　こんなに寂しがり屋の、臆病な甘ったれの、意地の悪い根性まがりの……

　こんな、崩れていく惑星の、死体の転がる地下の密室なんかで、たった一人で死なせたりしたくない。

　この人を、一人で泣かせたりしないで済むなら…。

神さま。

他にはなにも要りません。あと、もう、ほんのすこし。

この人の最期までを、見届けるだけの時間を。

…ひきかえになるのなら、たった一言を、伝えられなくても。

永遠に届かなくても、いいから。

自分のことは……　もう、いいから。

どくどくと、命が流れる。

床に川になるほど。

☆　★

（参照したければ資料）
↓
http://85358.diarynote.jp/201703161638344480/

☆　★

「〜〜〜きみが、いたら、死ねないっ！」

　張り飛ばした相手の頬にそのまま額をあてて、ただ黙って相手の心を聴いていたウェイは、うめくようにそう言った。

　涙をこぼすまいと歯をくいしばり、できる範囲で手早く止血を済ます。

「二時間、待ってろ」

　黒い瞳を静かに燃え立たせて、ほっそりと美しい博士は簡潔に言い切った。

「おまえを絶対に死なせたりしないから。必ず救けるから。だから…、

　脱出して、医療設備のある艦にたどり着くまで。二時間でいい。

　絶対に、それまで息をしててくれ。」

「……ウェイ？　まさか、そんな方法が…？」

「できるよ。僕を、なんだと思ってる？」

「……さすがだ。なら……信じますよ……」

　虫の息のしたで宇宙最強の男は微笑した。

「ただし……あなたも一緒、ですよね？　…また俺を……一人で追い返そうって言うんなら……」

「心配ない。一緒に、行こう。一緒に」

　あふれてきた涙をぐいと拭いて、ウェイはさらりと立ち上がった。

「だから、絶対に、生きててくれ……っ！」

　大丈夫です約束しますよと、リエンは最後に応えた記憶がある。

　自分のために泣いてくれている美しい人の言葉が嬉しくて、それきり途絶えてしまった意識の中で、次には目覚めた時には何といって「告白」を敢行しようかなどと、いとも暢気なことを考えながら。

☆　★

　そうして。

　つまるところウェイファン博士は真実かけねなしに天賦の才の持ち主で。

　その気になりさえすれば絶体絶命に崩壊する惑星からの脱出方法ぐらい、何とかなってしまうのだった。

　後日。

　ズタボロの重傷を負い、あまつさえ右手首をみずからスッパリ切断していたリエンは、当然のことながら肉体のかなりの部分を強化細胞で再構築しなおさざるを得なかった。それによって、以後、〈宇宙最強のなまみ（生身）男〉の通称は返上し、単純に〈宇宙最強〉と、その噂を広く銀河に流布されるようになる。

そして、手術の後にリエンの意識が戻るのを待つ猶予も与えられずに、超多忙な博士は、中断したままの研究課題が山積している《学究都市》へと、厳しく追い立てられて去って行った。

考えぬいた挙句の一言を伝えるために彼を追いかけて行こうにも、自分の遺伝子等級では、その惑星には立ち入ることも出来ないと、リエンが知るのは半年ほど後のことだった。

ーｅｎｄー

（実は一番最初に　↑　の行を書いているという…★）

（参照したければ資料）
↓
http://85358.diarynote.jp/201703161659271222/
（３）　（※【男性 同性 恋愛 】ものにアレルギーのあるかた注意★）
2017年3月16日 リステラス星圏史略　（創作）

★週刊？　ホーミング・ロード（仮題）

第二部以降の大粗筋

★週刊？　ホーミング・ロード（仮題）　第二部以降の大粗筋。

（1995.11.20.）

★週刊？　ホーミング・ロード（仮題）

第二部以降の大粗筋

☆　★

《学究都市》編

☆　★

《首都惑星》編

☆　★

《ガワンナラ》逆襲編

☆　★

※　この三つは、実のところリエンとウェイファンが一緒にいる時間がすごく少ない話。

粗筋を書こうと思ったらウェイファンの屈折した（かのＪＢ…ジェームス・ブライアン…に似ている）生い立ちとか、

死亡したと推定された時点で作成されちゃったクローン（というよりは遺伝子上の二卵性双生児。外見はそれほど似ていない）の存在との精神的葛藤と政治的対立の関係とか、

その争点になっている、遺伝子によるランク（階級）づけの成立の由来とか、社会制度とか星間史とか…、とにかく沢山説明しなくちゃいけないので、すでに疲れた（例によって最後の一行から逆行して書いている★）ので、今回パス！

二人の関係性でいえば「会いたいのに会えない」「相手にどう思われてるのか判らない」という、もろにハーレクインな展開のくだりである。

第一部もそうだが、脇キャラの活躍がおいしい。

ウェイファン博士の元からのグルーピー（？）連中が、集団コジュウトメ（小姑）と化してリエンをいびり倒す話、でもある。

（参照したければ資料）
↓
http://85358.diarynote.jp/201703171402503296/
★週刊？　ホーミング・ロード（仮題）　第二部以降の大粗筋。
2017年3月17日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

☆　★

《レンガの家》編

そんなこんなな《首都惑星》での生活も、繊細（？）…（「単なるワガママ！」…護衛官一同談。※リエンを除く。）…なウェイファン博士にとってはストレスの元凶で。

「休暇っ！」と称して最低限の人数のみ引き連れて出かけて行ったのが、リエンの故郷の惑星。

「Ｂ級認定のマイナーな施設のくせに、こんな優秀な人材（リエン・ドレングスン）を育成しちゃった養卵（？）所の、視察も兼ねる」とかいう大義名分も、後から付け加えていたけれども……。

　だぁ～れが、信じるかっ？

（外伝で、リエンが人工子宮で受精卵やってた時の、遺伝子提供者で科学者で名付け親になった奴のエピソード、なんてのもある。）

ひところ懐古趣味が流行していたこの星では、財力のある人間は古典的な建材で別荘を建てる（もちろん内装は最新式）のがステイタスとされていた時期があり…

とある広大な敷地のなかの、そのくせ建物自体はいたって小規模で「田舎の隠れ家」風の、可愛い煉瓦づくりの家に一目惚れしてしまったウェイファンときたら、無謀にも、「ここに引っ越す！」と断言し……★

うろたえる惑星警備隊担当者や通信画像越しに怒鳴りつける上司の血圧も無視しまくって、本っ当…に、居座ってしまった……★★

（彼がこの惑星に居着いている間のパンピー（Ｂ級）な警護関係者の神経と胃袋への負担とゆーたら、例えるなら最後のフランス王妃マリー・アントワネットが別宅〈プチ・トリアノン〉に注ぎこんだ血税と同じくらい、極悪非道なものがある…）

でもウェイファンは、特Ａとしての仕事のほうはキッチリきっぱり、それまで以上に効率よく捌き続けていたし、健康状態も格段に良くなったので、関係者一同は誰も文句がつけられなくなった…★

☆　★

んで。

仕事の合間に息抜きと称してお忍びで町に出かけて、（こんなとんでもないＶＩＰが一般の惑星に滞在中だ、なんて、もちろん公表なんかされていない。そんなことしたら狙って下さいと言わんばかりじゃないか…）

Ｂ級市民の女のコをナンパしたり、（ウェイは特Ａのくせして本当にそーいう事をする★　当然、モテるし。）…観光地でアイスクリーム食ったり、初めて本物の海で泳いだり…。

それまでは、かつての《イレギュラーズ》（不正規部隊）のメンバーを除けばいリエンぐらいしか見たことがなかった、ウェイファンの無邪気で無防備な素顔（？）がゴロゴロ出てくるし…

よその女の子にナンパされて持ってかれる（？）ぐらいならと、その気（どの気だ）が盛り上がってしまったのが、ウェイファンのお気に入りの護衛官の一人、ワァル・ジャール＝ジャルジェで。（本名？は、ワァルモア・フランソワ・ルジャール＝ド・ジャルジェ★）

命知らずにも正々堂々と名乗りを挙げて、正攻法で楽しそうーに、口説きにかかった。

当初は、「俺に勝てるほどの強い（いい）男なんかいない！」とか余裕をかましていたリエンだが、極悪非道で薄情者なウェイときたら、まんざらでもなさそうな対応をしたり、するので。

ちょっとかなり哀しーぃ想いを味わったりなんか、しつつ。

平和で平凡で忙しい、「休暇」の日々である。

（参照したければ資料）

↓

http://85358.diarynote.jp/201703171438397500

☆　《レンガの家》編　★　　（※　参照曲も変更しました☆）

2017年3月17日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (3)

☆　★

大脱走編

ウェイファンお気に入りの《レンガの家》での生活も、はや数カ月。

内部の人間関係（笑）を除けば、さして深刻な事件も起こらず、警護の人間たちもついついのどかになってしまう、今日この頃。

ひとしきり、また余計なプロジェクトを担当させられてしまったらしく忙しそうに外部と連絡をとりあったりしてガサゴソしていたウェイファンが、「ひと段落したから遊びに行こう〜っ」と、リエンにせがんで二人きりでドライブに出かけた、その帰途の、車中。

「頼みがあるんだけど。絶対に、聞いてくれる？」

と、のっけから卑怯な論法で博士が〈護衛官筆頭〉に出した無理難題というのが、「僕をつれて、この惑星から脱出してほしい」だった。

「身分証の偽造や航宙券の手配は僕がやる。一ヶ月以内にこの星から脱走して三ヶ月以内に惑星《ポーセーテン》まで行きたい。理由はいまは言えない」と。

ウェイファンが勝手に出ていく分には、後から問われるのは『職務放棄』という微罪（？）のみだけど、〈護衛官〉が、その警護対象である特Ａを「誘拐」して、仮想敵国まで逃亡するとなったら…。

問答無用の死罪。よくて終身流刑である。

知っててウェイファンは言っている。

「きみが、つきあってくれないなら、僕は一人で家出するよ。……出来るし。」

余計な口をはさむような無駄な時間をリエンは使わずに、顔なじみ（〈宇宙最強〉であるリエン

のファンクラブ★）の、地元のヤクザ屋さん達にその車中から連絡をとり。

「密出国の段取りつけますから、四日間ください。」

そして二人は言うとおりに実行し。

遺りの不運な護衛官たちはウェイファン直筆のフザけた「書き置き」を発見して、悲鳴を上げたのだった。

（ウェイファンが懸念したように「リエンが」特Ａを誘拐して脱走した、なんて思いこんだ馬鹿は、事情を知らない上層部はともかく、身近に暮らしてアテられ続けていた護衛官の中には、一人もいなかった……当たり前だ★）

（その代わり、任務の多さにぷっつんしたウェイファンが、リエンを唆しての「駆け落ち」だという説は、事件の解決後にも末永～く、しつこく根強く恨み深く、流布されていた…）

☆　★

怒り狂ったのは当然、ワァルである…★

まっとうな捜査線を敷こうとするタルテやガナン達とは別に、ワザワザ休暇願を出した上で、恋する者の〈勘〉だけを頼りに、単独で行動を起こし。

《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）の総本山《ラヌァガ》まで程近い、国境線上の自由都市《ポーテーセン》の、とあるＢ級市民向けの高級シティホテルの庭先で、一人で優雅にお茶しているウェイファンを三ヶ月弱の後に捜し当てた時には、心の底から煮えくり返っていた、わけだ。

その彼に、

「遅かったね。前の便で着くかと思ってたよ」

と、ニッコリ笑って言ってのけたウェイファンは、はっきり言って鬼畜である…

「～～～～っっっ！」

リエンはその間、別命を受けて渋々ながらの単独行動中で。（そろそろワァルが追いつくだろうというウェイの予測があったので、警護任務を引き継いでから出掛ける筈だった。

ワァルが一便遅れたのはウェイファンの期待を裏切って鈍だったからではなく、他のトラブルに巻き込まれて予定の便を逃したせいで、別の航路を乗り継いで回り込んで来た為。）

鬼のいぬ間のなんとやら……で、問答無用でウェイファンをベッドに引きずり込み、リエンが戻ってくるまでの一週間、部屋の外に出さなかった★

（ワァルの名誉のために敢えて付け加えるならば、笑って嘆息をついたウェイファンが、「しょうがないなぁ…」とか、ほざいて、まったく！抵抗しなかった…はっきし言って楽しんでいたようだ、というのも、事実である……★）

☆　★

まぁでも、何の意味もなく〈特Ａ〉のウェイファン博士がこんな身勝手な行動を起こす筈もない訳で。

ワァルの通報を受けてすぐに最大速度でもって飛んで来た護衛官ほか一同の報告を突き合わせて行くうちに、出るわ出るわ…〈特Ａ〉を検出する為の非常捜査線に引っかかった、違法な改造遺伝子の、保持者の数々…

黒幕は、と言えば、毎度の《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）のみならず、〈特Ａ〉会議の最高峰に名を連ねる人々の、ウェイにとってさえ手を出しずらいようなレベルでの、政争…なんていう、側面もあったりして…

かくて《ガワンナラ攻略》以来と言われる大規模な掃討作戦が展開される事となるのである。

（この辺の具体的な設定は、実は未詳★）

☆　★

蛇足ながら、ワァルと浮気に走った（と、言うよりは、耽った…★）件については、ウェイファ

ンは律儀に、リエンに報告しちゃってる。

リエン曰く、「まぁ、そうなるだろうとは、思ってましたよ…（嘆息）」で。

「あなたが楽しめたんなら、それでいいですが」とまで、言う★

その反応が、だいたい予測どおりとは言え実はかなりちょっと不服だったりしたウェイファンは、べったりとリエンの胸板に貼りついて、ぶーたれた。

内容の主旨は、「リエンはいつも僕の為にという事だけ考えていてくれるけど、ワァルは、自分がどう思われてるかとか、他の（リエンが）相手の時にも、こんな表情をするのかなぁ、とか、そういう事ばかりを沢山考えているんで、結局、任務で仕方なくシテいる時と同じくらい、疲れちゃった」……と。

リエンとしては、おなじ男として（？）（いや、ウェイファンだってオスなんだけどね★）、むしろワァルに同情してしまい…、

「読心能力のことは言ったんですか？　知っていれば奴だって、それなりの対応は、したはずですよ？」

とか、（ウェイの件を除けば、同僚としては認めあってるし仲も良いので）、思わず確認したら…

「言うわけないだろっ」と、いきなり殴られた★

はたから見たら馬鹿々々しい限りの痴話ゲンカだが、本人たちにとってはちょっと不幸な行き違いの冷戦状態のまま。

タッグを組んで軍と政府を動かして、国交問題だの権力闘争やらと、コトを構えるはめになった訳である……

☆　★

そして。

事件解決後に、今回の行動についての功罪を問われ、処分か昇進かで特Ａ法廷（国家最高議会）まっぷたつの大論争のあと。

最終的にはまぁまぁの勝利をおさめて一息ついた、ある晩。

「…ちょっと話があるんだけど…」

と、いきなり改まったウェイファンが、そのくせ、らしくもなく一時間以上も、のらりくらりと話題を回避し続けて、リエンに不安と取り越し苦労とイヤ～な予感★を感じさせるという無駄手間のあと。

「……終身契約（※）しないか……」

（※　要するに現代の「結婚」のようなもの）と。

後にも先にもリエンが見たのはこれ一度きりの、真っ赤っか～のユデダコ状態で、やーーーっっっと！　告白したのであった。

（契約内容について、「財産権の共有」は、特Ａの財力をもつウェイと無一文（これは謙遜）の自分とでは不公平にすぎるから削除していいと当初リエンは頑強に主張したものの、「またこれからも今度みたいな事があるかも知れないから、その時の行動に困らないように」と説得されて…）

〈契約〉そのものに、まさかリエンが異論を唱えようはずは、ないのであった。

（ただし。あまりにも、リエンにとっては意表をついた申し出だったので、返事をするまでに数分にも及ぶ白い沈黙が流れ……。

その間、ウェイファンが、「これは断られるのかっ？」と、深刻に怯えまくっていたというのは、ハタから見れば単なるコメディ（喜劇）である…★）

（参照したければ資料）

↓

http://85358.diarynote.jp/201703171455433905/

☆　大脱走編　★　（あっＢＬ成分が入ってます！アレルギーあるかた注意～っ☆）　（曲は変更しましたｗ）

2017年3月17日 リステラス星圏史略　（創作）

　その後の毎日　編

「とにかく自分は狭いところに閉じ込められて上司からガタガタ言われて仕事するのは性に合わないんだよ！」

と主張して、《首都惑星》への帰還を拒否したウェイファンは、それでも一般の惑星に間借り（？）して民間人に迷惑かけたり警備担当者達の神経をすり減らさせてる事に関しては反省してたので、

とある《学究都市》惑星の衛星軌道上に自前の研究所を設立してシャレで《タォグァン》（道観）（＝惑星地球・中国古代の宗教である「道教」の「寺」のこと）と命名した。

そこを根城に、《学究都市》へ短期で出張したり、《首都惑星》に遠征かけたり、上層部には内緒でお忍びで（リエンは当然一緒。でも他の護衛は撒いてしまう事もしばしば★）脱走かまして遊びに行ったり…

「我が世の春」状態。

☆　★

やがて数十年～数百年（？）の、仕事上のゴタゴタと日常のバタバタの繰り返しの後に。

《サテライト・ラボラトリー》（衛星道観）に《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）と敵対政治勢力の結託による大規模なテロが仕掛けられ。

できる限り研究員を退避させる努力をして自分は逃げ損なったウェイファン老師と、当然それを護衛して最後まで闘い続けた《闘仙》リエンは、《道観》の爆発に呑まれて同時に死亡。

細胞と記憶の回収も不可能だった為、クローニングはできず、二人の知識と戦闘技能とは永久に失われてしまった。

が、運よく《道観》を離れていた三人の子供達（二人の遺伝子の組み合わせで、ウェイファン自らが設計し、Ｃ～Ｄ級の生身の女性たちの養育チームを編成して手元で育てた）は、無事。

それぞれ後世に名を残す、独特の人生を歩いた。

そして二人は一緒に生まれ変わり、平和な世界で末永く、幸せに暮らしましたとさ。

ー　劇終　ー

★再び ↑ から書いている…★

★しまった！　生まれ変わった後の話まで、いま考えついちゃった！
（前世ネタは、すでにある。）

（参照したければ資料）
↓
http://85358.diarynote.jp/201703171607346689/
☆　その後の毎日　編　★
2017年3月17日 リステラス星圏史略　（創作）

★週刊！　ホーミング・ロード（仮題）★　第二部　《学究都市》編。　（1995.11.28）

（リエンの主観サイド）

（1995.11.28）

★週刊！　ホーミング・ロード（仮題）★

　第二部　《学究都市》編。

　　☆　★

（リエンの主観サイド）

　目が醒めるとそこは病院だった。機械的に治療にあたる医師や看護士たち。面会に来る者もなく、外部への連絡すら取りようのない毎日。全身の欠損部分を強化細胞に交感し、とりわけ損傷の激しかった脊椎の神経細胞が自前の脳との間に整合性を見いだすまで、指一本も動かすなと固定され、タンクベッドの中で意識と焦りだけが研ぎ澄まされていく。

　リハビリに移り、ようやく、冷淡な医師たちから許可を取り付けてマーレント（不正規部隊のナンバー３、キャラ設定は作成中★）らに連絡がとれた時には、既に《ガワンナラ》の攻略から半年以上が経過していた。

　リエンが入れられている場所は軍病院ではなく、Ａランク管理の研究施設であると言う。開発途上の新素材の、ていのいいモルモットとして扱われているのだと、面会許可の申請をさんざん拒否され続けていたマーレントは怒る。

　そしてそれはウェイファン博士の差し金かもしれず、あるいは全く与り知らない事なのかも知れない。

　〈特Ｂ〉である自分の権限をもってしても私用では通信を許可されない、管理がとりわけ厳しい〈学究都市〉の一つにウェイファン博士はいるはずで、この半年、真意を確かめるために手を尽くしてはいるが、どうしてもコンタクトが取れないと。

　はじめのうちリエンは楽観的だった。半年はかかると言われていたリハビリを三ヶ月で克服し、以前にも増した戦闘力を取り戻してとっとと退院し。外部との連絡が自由になると同時に、元准将のコネを使って〈学究都市〉へと私信を送りつけた。

　想いをこめた熱烈なラブレター……は、文才とは縁がないのを残念ながら自覚してるので、し

かたなく諦めて、折からの統一記念日（リスタルラーナ星間連盟と地球系開拓惑星連邦テラザニアが統一された日で〈新年おめでとう〉の挨拶が飛び交う時期である）にかこつけた、ささやかなカードを一枚。

　返事くらいは来るものだと思っていたし、自分をＥランク（実験動物）のように扱わせたのがウェイファンの意志だなどと、はなから考えていなかったし。

　けれど待てど暮らせどメッセージの一行だに来ない。

　軍務に復帰し、その合間に折々の季節イベントのカードを送り、逢いたいと伝え、意を決して下手クソな恋文まで綴り…

　一年経ち、二年が経った。

　とある惑星での内乱の鎮圧に出動し、戻って来たらば新たな負傷の治り具合を検査しがてら、強化細胞の交換をしてデータを取るからと、件（くだん）の研究所から強制入院の収容通知が来た。

　Ａランクの武官によって構成されている外務部隊の横柄な態度と命令の理不尽さ（加えてウェイファン恋しさ）に、ぷっつん切れたリエンときたら、軍病院と自軍の広大な敷地と宇宙港へと至るルートを舞台に一人で市街戦を展開してしまい。

「もう返事なんか待たないっ！」

　と、グレたついでに軍から脱走してしまった〈宇宙最強〉の男は、三年目の〈ユニファイ・カード〉（統一祝賀状）を自ら配達すべく、Ｂランクでは立入不許可な《学究都市》へと、正面きって乗り込んで行ったのだった。

　途中までは身分を詐称して航宙券を取り、《学究都市》の外港で正体明かしてついでに恫喝し。港湾施設ごと爆破されたくなければウェイファン博士に取り次げと…ほとんどヤクザである…★　（本人は悲壮な決意なんだけどね。）

　面会用の施設の一室に通されて待たされること実に数十時間。飲まず喰わずで煮えくり返ってハッタリでなく本気で破壊行為に及んでやろうかと、本当は徒手空拳で乗り込んで大した武器

なんか持ってやしないクセに、ゲリラ戦のプランを練り始めて危うく実行に移しかかった頃。

　ふらりと現われた赤茶けた髪に土気色の頬の、別人のように瘠せこけた人物が、恋い焦がれたウェイファン博士その人だと気がつくのに、数瞬の時間を要した。

「久しぶりだ」も「元気だったか」もなしに、

「なんだってこんな所にいるんだ？！」と、

　寝不足で赤くはれた眼をこすりながらウェイファン博士は不機嫌きわまりなく言う。

　その態度には「迷惑だ」という意志表示が明白すぎて、リエンには、もう何も言えなくなってしまう。

　やっぱり、《イレギュラーズ》（不正規部隊）で親しく暮らしたあの日々は、単なる幻だったのかと。

　〈特Ａ〉であるルー・ウェイファン博士に、Ｂランクの自分が、一時の気まぐれではあれ、情人として確かに愛されていたと、そんな思いこみは、あまりにも滑稽だったと…

　謝罪すらできずに蒼ざめて黙り込むリエンの表情を痛む目でしばらく茫然と眺めていたウェイファンは、「とにかく話はあと……、二時間したら起こして」と、かつて《ソウミー》（曹美）飯店（第一部で不正規部隊が長逗留していた安宿）での毎日と同じセリフをもごもごと呟いて、リエンの膝にばったりつっぷして、そのまま熟睡してしまった…。

（参照したければ資料）
　　↓
http://85358.diarynote.jp/201703231427058226/
★週刊！　ホーミング・ロード（仮題）
★　第二部　《学究都市》編。　（1995.11.28）
　（リエンの主観サイド）。
2017年3月23日 リステラス星圏史略　（創作）

　Ｃランクと呼ばれる市民はおおむね自然発生的に生まれる。

　自力分娩はさすがに症例が減ったが、愛しあう者どうしが双方の遺伝子を混合した子供を欲しがって何らかの手段で造り育てるという、ごく本能的な理由と方法で、人口が維持されている。

　対してＢランクは、そのほとんどが人為的な計算に基づいて生産・育成される。

　膨大な数のＣランク（下層市民）の間で秩序を維持し、Ｄランク（無法市民）と呼ばれる犯罪者・貧民階層を取り締まり、国境を守り、学問や文化・芸術を受け継いでゆく。

　そうした、官僚や将校や学者・教育者といった人材を供するべく、民営・官営の各〈受精卵バンク〉が、《人口管理局》からの委嘱を受けて、一定の成長可能性資質を持った胎児を「出荷」する。

　養成し教育するプログラムについては各星域の自治体ごとに内容が若干違う。

　〈Ｂランク〉は、数量と一定の品質のみを要求されて育てられ、ある程度の適性や条件づけは遺伝子の段階で施されているものの、成長の後にどんな職業や人生を選ぶのかは、原則的に各人の自由な選択に任されている。

　行政府の期待に応えた者は上級公務員として遺伝子の提供や、その他の義務を果たすことを求められ、引き換えとして幾ばくかの特権を手に入れる。

　そうした束縛を嫌う者は〈Ｂマイナー〉とされ、〈Ｃランク〉の市民と大差のない、気楽な一生を送る。

　そして、長い歳月のあいだに肥大し複雑化し過ぎた《天地》（リステラス）全域の行政を司るために、《人材資源局》によって直轄のジーン（遺伝子）バンクで設計され育成されるのが、〈Ａ〉または〈特Ａ〉と呼ばれる、特殊な階層だった。

（これらの人口比率は、Ｃランクの１０，０００に対し、Ｂランクはマイナーと特Ｂとを合わせて１，０００．Ａランクは１００。特Ａランクが１と定められている。）

　〈Ａ〉および〈特Ａ〉は、すべからくハイ・ブリッド（一代雑種）であり、生殖能力を持た

ない。また、その遺伝子にはすべての細胞にわたって特殊なプロテクトが掛けられてあり、違法なクローニングや薬物による洗脳や自白の強要などは不可能だとされている。

　その記憶容量と処理能力は各惑星のマザー・コンピュータ（母思考機械）に匹敵または凌ぐ。

　人工母胎内で胚から脳が形成されると同時に、公平無私な判断でもって全《天地》を理想的に治めるべく、人格的な条件付け（洗脳）と、必要と想定される限りの質と量を伴う、広範囲の知識の移植（プログラミング）とが、必ず行われるよう義務づけられている。

　各省庁から提出される必要人的資源の予測請求リストに基づいて《人材資源局》の科学者によって機械的に設計されるレディメード（既製品）タイプとは別に、Ａおよび特Ａで、その方面の専門知識を持つ者たちには、自分たちの後継者の遺伝子構成を自分で設計することも可能という、オーダーメイド（個別生産）の特権が認められていた。

　ウェイファン・ルー＝リュアンは個別生産タイプの中でも特例的存在だった。

　両親は、ともに外見的には女性体である。〈特Ａ〉のベルファスト・ルー＝カミュランと、〈Ａ〉ランクのレンツェン・リュアン＝バエ。

　まるでＣランク市民のように終身契約者の遺伝子だけを主体として（男性染色体のみは遺伝子上の近親者のものを借用）、組み立てられたウェイファンは、人工母胎の中でプログラミングを受けている段階から歴史社会学者である両親に見守られ、会話の音声や心音などを聴かされるという非常に古典的な「胎教」を施された。

　望む通りの結果が得られたと「長男」の成長ぶりに満足した両女史は、同様の方法を用いてウェイファンの「妹」、ウェイメイ・カミュラン＝バエを作成している。

　この奇妙な「一家」の存在は話題を博し、全《天地》に報道されてＢ・Ｃランクの人気を呼んだ。

　折から特権階級であるＡランクと、それ以下の市民との隔絶や、近い将来の離反の危険性に悩んでいた行政府が、人心掌握の方策として、慣例を破って頻繁にメディアに登場させたという要因もある。

　結果、テロの対象となった。

依頼主は《ジレイシャ》（星間帝国）とも《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）とも言われており未解決だが、実行犯が《ガワンナラ》（私掠兵団）である事は確実である。

ベルファストとレンツェンは即死、幼いウェイメイは救出されたものの数時間後に死亡した。

ウェイファンも生存は絶望的と推定されたが、十数年の放浪を経て奇跡的な生還を遂げている。

（この時代、特Ａの平均寿命は八百年近いので、十年ぐらいのロスタイムは大した問題じゃない。）

もともと復古志向が強かった両親の薫陶と、放浪時代にＣ・Ｄ・Ｅ各ランクと身近に接した貴重な経験を基盤として、その上で正規の教育を受け直したウェイファンは、近年ますます非人間化していくＡランク（特に頭脳労働タイプ）の没個性・無感情化と、そのくせ特権意識だけが先行して見知らぬ下層市民を数量データとしてしか捉えようとしない傾向に危機感を覚え、大幅な政策変更を求める論文（法案）を提出して議会の論争を呼んだ。

（対立する政治家たちについては《首都惑星》編に譲る）。

特Ａとしては若輩者の（百歳にもなっていない）うちにそれだけの業績を上げた天才児は、けれど失われたはずの人間性を多く持って生まれた故に、非常なテロによって奪われた両親と妹への想いを、記憶から消し去ることが出来なかった。

己れの、特Ａとしては失格であろう感情の振幅の激しさへの自己評価と、諸々の政治的事情の中で、ごく冷静に自分のなかの自殺願望を容認してしまったウェイファンは、

「どうせ捨てるにしても有効に」とばかり、

《ガワンナラ》（私掠兵団）との心中を企てた。

むろん、業務の引継ぎ等は周囲の誰にも内緒のうちに用意周到に済ませていた筈で、リエンの母性愛（？）に引きづられた自分がおめおめ生還してしまったという一事以外は、完璧に計画通

りに運んでいた…つもりだったのだが。

　上には上がいるもので、特Ａの中でも古株の古ダヌキで名高い直属上司から、

「死に損なったんなら帰って来い、オマエがいなきゃ始まらん」と説教をくらってしまい、大嫌いな《学究都市》に、首に縄つけてしょっぴいて行かれ。

　周囲や部下に押し付け済みだったはずの従来業務がそっくり戻って来た上に、

「てめぇ（自分）で提出した仮説の裏付けぐらい自分で取りやがれ」と、社会心理学のシュミレーション実験の責任者をも、押し付けられてしまった。

（自殺願望を持ち、なおかつそれを容認してしまった自分自身に罪悪感を持っているウェイファンは、その事を見抜いている人間に対しては、非常に立場が弱い★）

「…十年もこんな狭い場所に閉じ込められていたら、気が狂うッ！」と叫んだウェイファンは、予定を半分（以下！）に短縮するべく、とんでもないハイペースで社会科学者としての実験指揮と、政治家としての判断業務と、さらにもう一つ余計な開発プロジェクトを、（これは非常に個人的な動機で、自主的に）抱え込んでしまい。

　さらに、「とある大馬鹿者」のせいで綿密に組み上げた開発スケジュールをすっぽかされてしまい。

　予定のデータが取れなくなって、不眠不休の大ハードな調整作業の後に。

　当の「大馬鹿者」が、いるはずのない場所に来てノホホンと座っているのを見れば、これは猛烈に怒るに決まっていたり、するのだ。

　…平均寿命が四百歳に満たない「外」の世界のＢランクに過ぎず、そのうえ恋患いの末期症状を抱えている人間にとっては、わずか三年でさえ、ものすご〜く！長く感じるのだ、という単純な真実を、学舎ボケしていたウェイファンが思い出すのは、言われた通り２時間後に、やつれきった元恋人を、おそるおそる揺り起こしたリエンの不幸そうな顔を視界に捉えてから、だった…。

（…とっても気の毒な？…　「第三者の視点」サイド）。

（あっ、ここから若干ＢＬ色？入ります～っ？？、嫌いなかた御遠慮願いますッ☆）

☆　★

ところでこの沈黙の２時間に、二人っきりで、「何をやってるんだッ！」…と、下世話な妄想と格闘して悶々としていたのが、ウェイファン直属のガーディング・セクレタリー（護衛士兼秘書官）であるＡランクの面々である。

彼らは遺伝子を設計された時点から特Ａの手足となるべく条件づけされており、それ以上に自分がウェイファンその人の下に配属された幸運を喜び、職務上の必要を超えまくった熱意でもって忠誠を誓っている、そんな連中で。

そのくせ《ガワンナラ》攻略の再には「世間（下層市民）の常識を知らないし、目立つから邪魔」とか主張したウェイファンから冷たく追い払われ、栄光（？）の護衛任務を得体の知れないＢランクごときに奪われ。

あまつさえ、潜在的な自殺願望を叶えるための計画的犯行だったと後日になってウェイファンの上司から教えられて、「おまえら、何を観てたんだ？」と、叱り飛ばされ…

グレるグレる★

運よく《学究都市》までくっついて入れた少数派と、外部との連絡役を仰せつかった連中と、二手に分かれて凶悪化していた彼らは、Ａランクにあるまじき私情（この辺はウェイファンの悪影響だ★）に走り…

上司が出す指示のうちの「ある部分」を、すっかりきっぱり、ボイコットしまくっていたのだった。

☆　★

そんな事とは二人は知らない。

　疲れきった顔で眠るウェイファンに上着をかけて（頭脳労働者の多い都市部の室温はデスクワークの効率を考えて低めに設定されている。長袖２枚を着てちょうどいい程度で、うたた寝するには少し寒い。）、抱きしめていたリエンは、何か自分の恋患いなど、どーでもよくなってしまい。

　飼い主に捨てられた犬が、それでも与えられた愛情だけをいつまでも覚えているように、見返りなど要らないし、眼中に入っていなくてもいいから。何か自分でも役に立てることがもしあれば、どんなことでも手伝いたいし、知らずに迷惑をかけてしまっていたのなら、命に代えても償う…。

　指定された時間はすぐに来てしまい、これほど体調の悪そうな人間を起こしてしまうのは忍びないとは思いつつ。仕事の上での指示は絶対だと、かつて《不正規部隊》での日々で重々弁えていたリエンは、出来るだけ静かに、ウェイファンをそーっと、揺り起こした。

　見慣れない赤茶に退色して荒れた、長すぎる前髪の下で、濃い色の双瞳がぼんやり開く。

　目覚めてもしばらくは状況がつかめていないようで、居心地のよい、懐かしい広い胸にすりすりっと抱きついて、

「……あ～……、ご飯ン～…。…《曹美》特製（ソウミー・スペシャル）のライスポタージュ（中華粥）が食べたいよぉ……」

　大ボケ発言をかまされて、さすがに返答に窮するリエンであった…。

「…つくらせ（合成）ましょうか？」　つい律儀に訊ねると、

「合成器の食餌（エサ）なんかキライだっ！」

と、口をとがらせて言いかえしたウェイファンは、ようやく意識が覚醒したようで、

「……なんで、きみがこんな所にいるんだ？？」

「すみません……。」

ふりだし（２時間前）に戻った質問に、リエンは素直に謝ってしまった…。

つまるところ、非はすべて〈ＧＳ〉ガーディング・セクレタリー）の連中にあったのだ。

他人から寄せられる好意に疎い（単にニブい。あるいは故意に無視しているというウワサもある）ウェイファンが、そんな所でまさかのＡランクの精鋭たちが、くだらない嫉妬のエネルギーにかまけて職務放棄をしているなんて、気がつくほどの体力的な余裕もなかったし。

リエンからのカードをすごく嬉しそうに読んで、大事に壁に飾りながらも返事を書くだけの暇がなくて。

造反されているとは思いもよらない部下たちに、「よろしく言っといてくれ」とか「十分事情を説明するように」とか簡単に言付けて、それで気持ちは伝わっている筈だと、ウェイファンは思いこんでいた訳で…。

長年連れ添った（？）部下たちの不始末が、結果として軍需惑星での〈宇宙最強〉vs. 惑星全軍の市街戦（さいわい死者はなし）なんて困った事態まで引き起こしていたと知ったウェイファンは、頭を抱え込んでしまった…。

☆　★

そうした諸事情がきちんと判明して意思の疎通が図れるまでには少々時間がかかった。

不規則かつ細切れにしか休憩時間が取れないウェイファン博士には少しでも睡眠を確保してほしいからとリエンが頑として主張した為に会話は遅々として進まず、どうやら自分の訪問がウェイファン博士の社会的立場を悪くしていると遅まきながら気づいたリエンは〈学究都市〉から早々に退去しようとしたが、、感情的に不安定になっているリエンにすねられてしまい、果たせず。

「録り損なった強化細胞の実験データを採る」という名目で滞在期間を延ばしたはいいが、作業を代行した件のＡランク連中に裸に剥かれて必要以上にイジメられ。（いや、医学的な意味だよ★）

　その間にウェイファンは得意の詭弁と特Ａの強権を発動しまくって「市街戦」を「実験と訓練」と言いくるめ、〈学究都市〉へのＢランクの入国も合法化してしまい、〈ＧＳ〉達には「今度やったら左遷する」と釘をさし。

　〈ＧＳ〉のほうでは意趣返しに「機密事項が充満している〈学究都市〉内をＢランクにうろうろされるわけには行かない」と主張して、訪問施設の一室にリエンを事実上軟禁することまでは、出来たのだが。

　片道１時間かかる上に警備の手薄な外港付近のその部屋まで、忙しすぎてダウン寸前のウェイファンが毎日わざわざ「寝に帰る」という報復手段に訴えられては、もはや対抗できず…

　なんだかんだで一ヶ月ほど、ウェイファンの私室に寝泊まりすること（でも「一緒に眠っていた」だけ）を許された（外出は禁止）リエンは、めったに戻って来れない家主を待つあいだの暇つぶしにと、部屋にあった古い文献を読ませてもらい。

　利用されなくなったせいで廃止手続きすら忘れられている古い法律に、誰でも生産された時のランクに関わらず、資格試験を受けて上位のランクに認定される方法があるという事を、発見したのであった…。

（なんでそんな古い文献をウェイファンが私室にわざわざ取り寄せて、リエンの手紙と一緒に机の上に飾ってあったのか、なんて事は、リエンは鈍い？から、気がつかなかったらしい…が★）

　そしてウェイファンは目論見通り、十年と言われた仕事を半分の歳月で消化してしまい。

　晴れて〈Ａランク認定〉を勝ち取ったリエンとは、《首都惑星》で再会する事になった。

（没原稿）

※⇒http://85358.diarynote.jp/201703231535015051/
（…の途中から、旧バージョン。）

　結果、テロの対象となった。

　依頼主は《ジレイシャ》（星間帝国）とも《ジャヌアーラ》（邪樹神教団）とも言われており未解決だが、実行犯が《ガワンナラ》（私掠兵団）である事は確実である。

　ベルファストとレンツェンは即死、幼いウェイメイは救出されたものの数時間後に死亡した。

　ウェイファンも、生存は絶望的と推定された。

　欠損した予定人員を早急に補うべく、《人材資源局》はウェイファンの遺伝子データを基盤に多少の変更を加えたのみで、ほとんど複製とも言える胎児を生成し、ベルツェン・ルー＝リュアンと名付けて通常に倍する速度での教育を施した。

　ところがウェイファンは生きて帰還したのである。

（射出された救命ポッドを回収したのがＤランク（無法者）の船で、中央の情報に疎かったので、まさか特Ａとは思わず、色子として売り飛ばそうとした。強姦されかけた際の危機感から潜在していた接触テレパスの能力が発現。その他、特Ａとして施されていた知識の限りを駆使して《天地》の治安が及んでいる星域に戻るまで、Ｃ・Ｄ・Ｅ各階層の、それぞれの生活をつぶさに体験し、いろいろ助けてもらったり親切にしてもらったり、殺し合いをしたりも、した。

　その間に十年以上の歳月が経過している。

（特Ａの平均寿命は８００年近いので、十年くらいは大した時間じゃない。）

　社会行政学者候補生としてのウェイファンの欠員を埋めるはずだった、順当に規格通りの教育を受けたベルツェンと、下層階級の生活と感情の機微とを実地に体験し、特Ａとして得難い知識を会得して生還したウェイファンと。

　困り果てたのは《人材資源局》である。

　どちらを登用するべきか、にわかには判断がつきかねる。

Ｘ　ベルツェン・ルー＝リュアン
Ｏ　ウェイレン・ルー＝リュアン

「試験くらい、受けさせたら、どうです！」

「試験くらい、受けさせたら、どうです！
　これは法律で保障された権利であり、義務なんですよ！？」

「差別」（区別）される側が、その扱いを、
「努力からの解放」と受け止めて、
「喜んで」受け入れてしまった時、

果てない闘いよりも、見せかけの平和を、選んだ時に、

その社会の制度は固定化し、見えない鎖となって人々を…

"特権階級" に座した者をも、もろともに…

　しばりつけるのである。

（参照したければ資料）
　　↓
http://85358.diarynote.jp/201703241801384990/
《円卓都市》における、体型の比較。
2017年3月24日 リステラス星圏史略　（創作）

★★週刊！★★
ホーミング・ロード（仮題）
★第三部・《円卓都市》編。
（1995.12.06.）

（あっ　【ＢＬ】　大全開です～っｗｗｗ
嫌いなかた、ご注意ッ☆）

★イントロダクション★

★週刊！★　★ホーミング・ロード（仮題）★

第三部・《円卓都市》編

※ジグゾーパズル（物語の進行順に作者が書くとは限らない）バージョン。

★イントロダクション★

　かつて《我が美わしの天地》（リ・イス・スタル・アールラーナ）とまで呼ばれた旧首都惑星も、消耗しつくした自然環境の復元のために今では保護官以外は立入禁止の厳重な保全指定星となっている。

　その密閉性と歴史性に利用価値を見いだした《特Ａ会議》が、溢れかえる熱帯雨林をはるかに見おろす惑星エレベーター（軌道塔）の中腹、ちょうど重力が０．８Ｇになる辺りに彼らの本拠地を設置して、テラズ（地球）の古い物語にあやかり《ラウンド・テーブル》（円卓都市）と名づけたのは、今から一千年ばかり昔のことだった。

　その、宙に浮かんだ〈円卓〉の中、人工のものとは思えぬほど広大な都市空間に、つい先ほど衛星軌道からの入国降下を許されたばかりの背の高い男は、ごく慎重に感慨ぶかい第一歩を踏み出した。

　ここへ至るまで数年間の苦闘と努力とがようやく報われたのである。

　かと言って、浮かれて油断すれば元のもくあみ。少しでも問題や悪評を起こせば極めてアッサリと、無情きわまりなく叩き出されてしまいかねない事実も、重々わきまえている。

　はなはだ不純かつ私的な動機につき動かされて勝ち取ったのだという自覚は十分にある、Ｂランク（下層階級）出身者である自分の昇進（？）を、快く思わない者の方がＡランク（特権階級）の中には多いらしいのは、先ほどの、特例入国者についての連絡はとうに受けていたはずの管理官の、イヤガラセとしか解釈しようのない執拗かつ原住な審査手続きの数々にも、端的に現わされていたし。

「逢いたい人にいつでも逢える」

…ただそれだけの権利と立場を確保するために自分がどれだけの犠牲を払い、そして、そんな自分を「必要だ」と言ってくれた当の相手が、たださえ多忙な時間を割いて、どれほどの心配りと根回しとを、図ってくれたのか。

それが解っていてなお下級役人相手にくだらない短気を起こせるほど、彼、〈宇宙最強の〉と定冠詞をつけて呼ばれる戦士リエン・ドレングスンの堪忍袋は、軟弱ではなかったが。

「少し遅れちまったな…」

転属初日から約束の時刻を守れそうにないことは実直な軍人としては十分に腹立たしい問題では、ある。ましてやその出頭先で待っている新しい上司こそが、じつに五年ぶりで再会する、最愛の相手であれば。

行きあった〈Ａランク〉（高級官僚）の一群に声をかけて方向を確認し。

この数百年ぶりの闖入者のことは聞き及んでいるのか、大勢の無遠慮な視線で興味津々と、見送られながら。

高さ数百メートルに及ぶ天蓋に覆われた空中庭園のなかの、青銀色を基調とした高雅な建造物の間を、わきめもふらずに男は急ぎ足に歩いて行った。

（　！　ウェイファン……っ！）

どんなに遠目であろうと見間違えるはずがない。

危惧したとおり時間に遅れたのがまずかったのか、教えられた目的の建物から歩み出てきた一行が、数階分の眼下を横ぎってどこかへ去ろうとしている。

見覚えのある細い肩を視界におさめた瞬間に、リエンの忍耐は消しとんでいた。

ためらいもなく階段の手すりを越えて落差を一気に縮める。着地すると同時に走りはじめた重量のある長身は、しかし豹のそれのようになめらかな動きで、ほとんど足音を響かせはしなかった。

「……ウェイっっ……！」

　呼びかける。積年の、想いの限りをこめて。

　背後から投げられた声に、その名前の主が振り返るのと、我を忘れた戦士が夢中でその護るべき人を抱きしめてしまったのが、ほぼ、同時で。

「……なっ……？？」

　硬直する細い肩を、頸を、やわらかい髪と頬とを、こわさない程度にきっちり抱きしめたドレングスンは、しばらく忘我の状態で。

「…ウェイファン（唯歓）……っ、逢いたかった……！」

　人目もはばからず唇を重ねようとまではしなかった、あたり、まだ彼の鉄壁の理性は健在だったと言えよう。

「～～～～っっ！？」

　たぐいまれな体躯をほこる狂戦士の太い腕に包まれては少年とさえ見える細身の青年は、無言のまま弱々しくもがくばかりである。

　ややあって、コホンと、遠慮がちな咳払いが響いた。

「…今日づけでＡランク待遇に認定された、リーエンタール・ブレイヴ＝ドレングスンですね？

　その方は少し対人接触嫌悪症の気（け）があるんです。放して差し上げてもらえませんか」

「…接触嫌悪？　……っって、え……？」

　発言者のほうを振り向けば、絶世・傾城のと、称揚してもさしつかえないほど見事な曲線の肉体美のうえに、驚くばかりに整った顔立ちの、優しげな赤毛の才女である。

（こんな美人が目にも入らなかったとは…）

　と、しょうもない方向性でおのれの舞い上がりぐあいを自覚したリエン・ドレングスンは、同時に、彼女のすんなりした両肩に燦然と輝いている襟章が、名だたる特権階級である〈Ａランク〉の中でも、〈特Ａ〉に次ぐ、その補佐をもって任ずる〈副官〉（サイドパースン）の位を示す

ものだと、軍人の性（さが）で即座に見てとっていた。

　渡された資料の中で自分の上官たるべき人の副官として記載されていたのは、美女は美女でも今を盛りと咲き誇る目の前の華やかな存在ではなくて、未だ硬い印象を残すつぼみというか美少女の、はずだったのである。

　その示すところの論理的帰結はと、突如として回転速度の鈍った脳髄に鞭をくれて活性化を図った矢先。

「……頼むから放してくれないか？」

　冷たいと評するよりは他人行儀なうえに棘（トゲ）のある、まったく聞き覚えのない声調に、

（　ええぇ〜っ！　）

　と、音にならない驚愕の叫びをあげて硬直したのは、今度は闖入者のほうだった…

　どんなに遠目であろうが得意の変装の限りを尽くそうが、自分だけは一目で見分けてみせると自信を持ち、そう相手に言い切りもした、最愛の相手をまさか……そんな……

　おそるおそる、とがった肩から腕を離してみる。

　その華奢な骨格の質量も形状も、記憶にあるその通りなのに……なのに。

　やはり心持ち、ほんの、少しだけ、自分が求めてやまない人とは異なる、陶器のように硬い感触をそなえた整った横顔に、黒とも見まごう濃い紫の、青みがかった光沢の髪。

　そして何より自分を見据える、無関心かつ軽侮の浮かんだ両眼が。

　……すべての自信が崩れ落ちて世界が滅びる瞬間を目撃したような顔をしている彼に、くだんの才媛が少なからず気の毒そうな笑みを見せて、紹介の労をとった。

「こちらは 蕗 唯連（ルー・ウェイレン）博士と呼ばれていらっしゃいます。
〈特Ａ〉の、ウェイレン・ルー＝リュアン。あなたがお探しの 蕗 唯歓（ルー・ウェイファン）博士とは…　そうですね、〈双子の兄弟〉にあたる間柄とだけ、申し上げておきましょう。

　詳しい事情は《円卓都市》だけの内聞事項となっておりますから、ご本人から直接お聞きになったほうが、よろしいかと」

「双子ぉ～？」

　安堵と疑問が同時に訪れて、悲しいかな天才とは呼べない頭脳の所有者であるリエンは、さらなる混乱を来たした。

　遺伝子の組成段階から一体ずつ個別生産で、クローン（複製）も不可能だとされている《特Ａ》に、双子、なんて存在が……、あるのか？

　もっともかつ初歩的な疑問に気をとられていた彼は、〈特Ａ〉の〈副官〉（サイドパースン）という特権的立場を享受している彼女が、〈Ｂ階層〉からのなり上がり者に過ぎない自分に対してずいぶん礼儀正しく、かつ好意的でさえある事の不思議さに、その時その場では思い至ることが出来なかった。

「歓（ファン）ののオフィスはそこの７階だ。今日の会議に出るつもりがないなら、今頃は見苦しく焦れながら、待っているんじゃないか」

〈対人接触嫌悪症〉と説明された通り、リエンに触れられたあたりを神経質に打ち払っていたウェイレンが、硬い声音で冷たく言い放つ。

「彼が何をしようと私には関わりない事なのに、不可抗力で今日のような目にいつも遭う。

　……迷惑だ、と、伝えておいてくれ」

「連（レン）、それは」

「アルマ、早く行こう。私は私用で会議をさぼれるほど、不真面目でも暇でもない」

「ウェイ…」

　振り返りもせずに歩き去る後ろ姿に哀しげな視線を走らせて、アルマと呼ばれた赤毛の美女は、すまなそうな横顔でリエンに一礼するなり、青年のあとを慌てて追っていく。

「……なんだってんだ……？」

らしくもなく疑問を口に出して呟いた彼は、彼女のみごとな長髪の紫がかった深紅色が、変装するのは「実益を兼ねた趣味」と嘘ぶくウェイファンの滅多に見られない本当の髪の質にずいぶんよく似ているなと、遅まきながら気がついていた。

（ロング・ウェイ・ホーム）
（２００６）

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その一。

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その一。
2006年5月20日 連載 コメント (2)

……さて。

かなり（とても）強引な方法で旧ジースト帝国領を併呑してしまったリステラス星圏政権ですが、この強引な「統合」によって、「同根の単一（※）人種による、一銀河単位の統一政体の成立」と見なされて、「おめでとうございます！　あなたの銀河系は《汎銀河協商》への加盟が認められました♪」……という、アヤシイ？お呼びがかかります。《汎銀河協商》というのは、複数（かなり沢山）の銀河系群ならびに銀河系間の《深宇宙》と呼ばれる空間（宙間）を監理監督していて、一部の犯罪者群の暴走抑止も含めて、一応の平和状態に保たせている、高次知能保有生命体群による、友好通商条約監視機構のようなものです。簡単に《宇宙連盟》とも呼ばれてます。d(・_・)

統一政体の成立を目論んだリステラス政権の「影の仕掛け人」の御一同は、もちろん当然、彼らの存在を視野に入れての謀略でもあったので、「待ってました♪」とばかりに諸手をあげて「加盟に賛成多数」の世論を形成してしまい、とっても形式的な「国民投票」の既決……いや帰結として、汎銀河協商に加盟を決定しました。

（※「同根の単一人種」：　それぞれ別の惑星から発生したはず？のリスタルラーノと地球系諸人種とジースト人とゼネラ人は、何故か？ほぼ同じ組成の大気を呼吸して生存可能な生命体同士で、例外（変異種）も多々あるものの原則的には二足歩行で一頭一胴二腕五指のクリソツ同類項な体型。ほぼ同じ組成の食物を摂取し消化吸収しての生存が可能ですし、ほぼ同じ細菌類に感染して同様の症状を惹起します。そして死産や流産などの致死遺伝子的な制約はかなりあるものの、自然交配による妊娠出産まで可能な「近縁種」だったり致します。
そして汎銀河協商の他の生命種と言えば、もっととんでもなく縁の遠い生命体……血液ミドリ色とか金属骨格とか珪素生命体とかタコ足配線型宇宙人とかとか……だったりしたりします……（^◇^;））。

汎銀河協商の他の文明圏との通商によって航時探査機（※）の開発技術を手に入れた《リステラス＝ジ・レイズ》文明圏（略称：《リ・ズ》）は、その後、統一政体による長期安定政権が長く永く続いて人々がヒマを持て余したことと、「いわれてみれば、私たち何故か《同族》だよね……？？」という疑問が大きくなって、それをトコトン追求するだけの経済的余裕と往来の

安全が保障されたこともあって、過去の歴史を精査し分析検証して発表したり意見交換したりしあう「イロニナンズ」が大量に発生しました。

（注：従来のように文献を集めて調べたり考察したりするのが「歴史学者」、遺跡を発掘したり炭素年代を鑑定したりするのが「考古学者」、それらの手段と知識（仮設）を踏まえつつ、手に入る限り最高度の機能を備えた「航時機」を入手して過去へと飛ばし、入手した情報を自慢しあう(笑)のが、「歴史オタク」や「写真オタク」とも言うべき、でもやってることはどっちかと言うとルポライターみたいな……「イロニナンズ」……です。）

（ついでに言うなら、今ココで私が「書いている」内容物は、すべてそこから「翻訳」しただけのモノである……というのが、物語全体の「仕掛け」でも、あったりしますが……。(笑)）

（※「航時機」：　この時点でリズ文明圏で入手可能（許可保持）なのは、過去に向けて記録観測装置を飛ばす機能だけです。他は未だ「精神的未熟種故に危険」ということで、「免許」（所有許可）が取れてません。）

……で……。

非常に長い間、《リ・ズ》の中央政権は、安定して続きました。基本的には「法の下に万民が平等」で、すべての「人類」（と判定され得るレベルの知性保有生命体）には基本的人権が保障され、たとえば「働きたくない」自由も認められているので、何もせんとブラブラ遊び暮らしていても、生存を維持するのに必要な「最低限度の」衣食住と医療は、無料で提供されます。参政権も選挙権も被選挙権も、（最低限度の識字能力試験に合格しさえすれば）万民が保有するというタテマエですし、参政したくない権を主張する自由も、当然認められています。

そして、そういう時代が千年（以上？）も続くと、どういう事になるか……？？？

と、いうことで、色々歪みが発生して来た時代が、
次なる物語の舞台になります……。

d(・_・)”

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その二。

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その二。
2006年5月22日 連載

さて。

大量なる「後世の歴史家」たち、こと、単なる歴オタ（歴史マニア集団）とも言える「イロニナンズ」らによって、後の世には《黄金の千年紀》と名付けられ懐かしまれた、この時代の、主な制度上の変化は、2つあります。

まず第一に、当初は「万人平等」のタテマエであった《リ・ズ》星圏内で、「遺伝子等級別階級差別」ともいうべき現象が自然発生的に現れ、それに関しては何ら法的根拠は認められない（法定されていない）にも拘わらず、社会の非文法として一般常識化してしまった、という点。
この直接的な原因としては、自由恋愛による自然出産率が非常に低下したことが挙げられます。地球系人類には過去の原子力・化学戦争の後遺症として遺伝子疾患や変異を持つ少数種族が非常に多い為に、全人類の中から自由恋愛で無作為に繁殖相手を選んだ場合、遺伝子の相性が悪くて妊娠不可能な確率が非常に高くなりますし、さらにそれがリスタルラーノ系やジースト・ゼネラ系と恋愛してSEXして自前の遺伝子だけで天然自然に子どもを授かろうと思うと……宝クジなみの出生率になってしまいます……。
また、「まったく働かなくてもとりあえず生きて行かれる」程度に社会保障が充実しすぎた為に、身を持ち崩すとゆーか、生活習慣が乱れまくるとゆーか、「恋愛もしくはSEXだけなら興味はなくもないけど、家庭だの子どもだの子どもの人権に配慮した子育てだの教育だの、面倒な責任は持ちたくないよ」というライフスタイルを選択する人々も、年々歳々、増加の一途を辿ります。
上記2点の帰結として、「とりあえず双方の遺伝子の使える部分をつなぎ合わせて、双方の特徴を受け継いだ部分のある、そして自力で長期生存が可能な健康体で、できればなるべく見た目やオツムや性格が優秀な、自前の子どもが欲しい」というカップル達からの要求と、「ボランティアの提供者たちから蒐集した遺伝子（※）を総当たり戦的にフル活用しつつ厳重に選別して、自主的に勤労への意欲やヤリガイを見出し、積極的に社会を維持するべく参画する、行政組織の構成人員を、安定的に【大量生産】しないと、今の体制が維持できない★」と危機感を抱いた行政組織からの試験管ベビーの大量安定生産（市場出荷）の要求と……、を満たす為の、遺伝子操作（設計）と乳幼児～学童期の集団養育（人材育成）のノウハウを持った、幾つかの民間企業が大きな存在感を持つようになります。

（※蒐集した遺伝子：　後には遺伝子の提供が「義務」制度になります。）

で……。

「優秀な遺伝子配列」や、「ニーズに合わせた適性教育（政治家とか音楽家とかスポーツ選手とか単純肉体労働者とかセックスワーカーとか軍隊の歯車とかとか）の行い易い半規格品（セミオーダー）人種の安定生産ノウハウ」などが特許の対象となり、当然のように生産価格にランク付けやステイタス化が起こり。

大雑把に言うなら全ての「知性保有人類」が、その依って立つ遺伝子の優劣によって「ABCDE」の5段階にランク付けされて呼ばれるようになります。当然？その遺伝子のランクによって、選択できる職業や、昇進できる役職に、差別や偏見や抑圧が、発生して来てしまうわけです……★。(=_=)。”

（※後に、それぞれの階級の平均より優秀なS–スペシャル–級をカウントする方式が導入されて、10段階評価になります。）

そしてこの時代の大きな変化の第二に、そうした「生まれつきの」規定値に制限される生き方を好まなかったり、あるいは押し付けられた「万人平等」というタテマエのヌルマ湯的な日々を潔しとしない人々が、「機械化」や「生体脳の増設処置」等々の人工的手段を選択（※そのこと自体は合法的かつ積極的に行政府により推奨されていますが）したり、その費用を調達するためにしばしば非合法的な手段（犯罪）を採用したり、費用調達の手間さえ惜しんで他人様の装備を丸取りする為の「勝ち抜き武闘大会」（※勝った者が負けた者の人工増設部分を「好きに解体して持ち帰っていい」というルールの、ある意味メンコのような？非合法スレスレのスポーツ？の賭け試合）を考案したり。そこでプロ化した賞金稼ぎや、他人のパーツを勝ち取ってはジャンク屋に叩き売った金で豪勇したり、それを買ったり売ったり改造したり修理したり闇市を開催したり……という、関連する職業に携わる人種や、武闘大会を観戦したり賭けに噛んだりする人や、その家族や恋人や……が、徐々に徐々に、かなりのスピードで、増殖していきます。

彼らの価値観は「チカラがすべて」。「強い者（単独）が正義」で「正義はカッコイイ」。「カッコイイ個人を集団のチカラで無理矢理ねじふせるのは、不正義でカッコワルイ。＝悪＝」という基準になります。で、「集団のチカラ」の典型とも言うべき、「行政（お役所）」は、カッコわるさ（＝悪＝）の総本山。……という、帰結になるわけです。

（　ついでに言えば、「個人的な強さ」（＝超天才で、かつ最強のESP能力者＝）として史上に名高いサキ・ラン＝アークタスとその相棒のシスターナ・レイズの二人組が、何故かこの時代に

は「神格化」されていて、「勝利の女神（超美少女）と黄金のトラ」というキャラクタライズで、武闘大会のシンボルとなり、かなり本気で「信仰」の対象となり、崇拝されています。　＜よってこの人々を「中央」側では便宜上「女神教徒」と呼んでいます。　）

　《リ・ズ》体制に従順な「中央側の」人口に比べれば、せいぜいがとこ1000分の1ぐらいの割合なのですが、その増殖スピードに不安を抱いた行政サイドは、武闘会における人権・生命の軽視と非合法性を指摘追求して、合法的な「解散」を迫ります。が……。「法と軍隊」をもって「制圧」にかかられるのは、彼らにとっては最も忌むべき事態で。意固地になって逆ギレした「カッコイイ＝強い＝個人同士のチームワーク共同戦隊」みたいなものをにわかに結成した彼らは、断固不退転・徹底抗戦。膠着して泥沼化して長期戦に転じて要塞化して、持ち出す武器や装備もだんだん本格化して……。

　もともとが烏合の衆である彼らにはそもそも指揮系統というものが無いので、それが逆に体制側の指導者にとっては「取り締まり」が難しい要因となり、後追い的に追加派兵を重ねては散々な人的被害を被り……。
　数十年にわたり徐々に深刻化して悪化した「抗争」の挙げ句、それは「内乱」とか「武装蜂起＝クーデター＝」とか呼べる規模になってしまい、人口比で言えば千分の一程度だった「女神教徒」は、ゲリラ戦的に出没しては超強度の「気波壁」で取り囲んだエリア（宙域）を拡げて行くことで、もともと《リ・ズ》の中では人口密度が薄かった旧《ジ・レイズ》エリアを中心に、星圏版図（銀河系）の10分の1ぐらいを「治外法権自治区」として掠め取り、勝手に「独立」を宣言して、鎖国を断行。そのまま「とじこもり」の体制に入ってしまいます……。

　んで……。

　この「対《女神教徒》戦役」の際に、《リ・ズ》側総指揮官（初代）の不手際によって非常に無用に大量の戦死者を出してしまった悲惨な戦場がありました。で、そのゲリラ戦の泥沼から九死に一生を得て生還した現場の指揮官が、その功績その他によって順調に昇進を重ね、最後には何とか「対等」な立場での「休戦条約の締結」まで持ち込んだ……あと。

　「そのお手柄を表彰してやろう」と《中央》まで呼び出され、祝賀会（表彰式）のド真ん中……で。「部下を皆殺しにするよーな作戦を立案したテメーが無能なんだよ!!」と、当時の総指揮官で今は更に上に「出世」していたヤツを、全銀河ナマ中継で報道されていると知っての上でドカ

ンと殴り倒し……。

(^◇^;)げっ　(^◇^;)げっ　(^◇^;)げっ

今までのお手柄からするとクビ（除隊）にするわけにもイカンので、思いっきし降格して閑職にまわして飼い殺しにして……おこう……と、僻地の舞台にトバされて不遇を囲っていたところで、

次なる物語の主人公に、遭遇するわけです。

d(・_・)

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その三。

『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）　その三。
2006年5月24日 連載 コメント (1)

☆ネタバレ防止機能発動中☆　d(・_・)""

というか……。
リンク先の
りーすりんぐさんが
「ボーイズラブ」はお嫌いだそうなので(笑)

詳細割愛でございます……　(^◇^;)d"

結論から言うと。

かなり屈折した前半生を送ってきて
ちょっと不遇で屈託していた軍人と、
とても屈折した前半生を送ってきて
尋常でないほど鬱屈していた天才の、
爆裂激甘最強迷惑バカップル（？）、
かなり色々と根性で頑張ったのです。

だんだんと強固になっていく遺伝子等級別階級差別観が、
そのまま固着して法制化されてしまうことのないように、
ばりばりに警戒されまくって完全鎖国状態の女神教徒側
領域となんとか連絡をとり「国交」を再開して共存共栄
おたがいの価値観とライフスタイルを尊重しあう銀河系
本来の理想の姿に立ち返らそうと政治経済文化面で色々。

しかしながら……。

途中まではかなりうまく「巻き返し」が進んでいたはず、
なのですが。

「女神教徒側の凶悪テロ」を装った、

味方（？）陣営側からの卑劣なミサイル攻撃によって、
二人一緒に爆死してしまいます……。（※）

(T_T)/”

ま、
二人一緒に仲良く死んで、
二人一緒に仲良く転生し、
二人一緒に仲良く人生を、
やりなおした模様なので、

本人達には、
さしたる不服はないでしょう……☆　(笑)

（※それにつけても、
何で同じネタを実行しやがるかな、
9.11……★　　(＞_＜)””

私のアタマの中にこの話が湧いて出たのって、
（資料によれば）1995年の秋だぞ……☆）

？(^◇^;)？

（ゴーイング・ホーム）
（２０１０）

ＢＬ・Ｈ・ＳＦ　（のメモ。）
2010年8月23日 連載 コメント (1)

（ていうか、あらすじ？）

Going Home　act.1

そいつを一目見たとたんリェンはいやな予感がした。
こういうやつは、長生きできない。
ただし「激戦区の最前線では」という注釈がつくし、いまは停戦中だ。
そうはいっても自分のような職業軍人が特別招集を受けるぐらいだから、どうやら再び上のほうの、いわゆる「政治の世界」方面では、きな臭いことが起こっているらしい……。

できるだけ、守ってやろう。

おそらく自分の部下になるであろう相手に保護の必要を感じて瞬時に心を決めたリェンは、その若い男（あるいは少女か？）がひとり所在なげに待ちぼうけているだだ広い集会室に、ゆっくりと足を踏み入れた。
規定の集合時間まで、まだ３０分ほどある。彼もしくは彼女は、どうやら早めに来すぎたらしい。
「よぉ」
声をかけるより早く、気配を感じたのか、窓の外をみていたその人物はくるりと振り向いた。
印象的な、瞳だった……。

（続く）　……とは、限らない……（苦笑）☆

とりあえず続いちゃいましたね☆（@2010.08.24.）

http://85358.diarynote.jp/201008240832262727

編集する

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2010年8月23日8:11

ここ１５年ほど、ずっと書きたいなぁと思っている、（でもシリーズ物のネタとしては個人的には比較的、歴史が新しい）、未来ＳＦ社会の戦争（民族紛争）とか政争とか社会システムの歴史的変異とかが舞台の、だけど純粋「恋愛もの」。

（＾＾；）

「ケータイ小説サイト」とかに投稿したほうが、いいのかなぁ～？？？

Going Home 2　　2010年8月24日

Going Home 2
2010年8月24日 連載 コメント (1)

http://85358.diarynote.jp/201008230806215037/
の続き。

　透明感のある紫水晶色の、大きな瞳。

　びっくりと、さらに大きく見開かれた眼のまわりは濃褐色の長い睫毛でくっきり縁どられていて、さらにその周囲は、遺伝子的な特徴でもあるのだろう、よく陽に灼けた、艶のあるクルミ色の有色人種の肌で、もうこの配色だけで、〈平均種〉でも〈標準系〉でもない、〈特別配合〉であることが知れる。

　まぁまぁ整っているといえる容貌。広い額。こなまいきそうに、ちょっととんがった口。

（……喧嘩っぱやそうなやつだなぁ……）

　相手にそんな第一印象を与えているとも気づかぬふうに、その、静止してさえいればかなりの整った美形にみえるであろう顔は、ひとりで百面相をしていた。

　どんな反応をしたらいいのか、自分でも決めかねているというふうにめまぐるしく顔中の表情筋をけいれんさせていたそいつは、やがて一瞬のうちに毛細血管すべてを総動員したように真っ赤になって、ぱくぱくと口をあけたりしめたりしはじめた。

「……リ……、リェ……、レ……、ど、ド、ど……ドレ……ッ!!!???☆★」

　目んたまが落っこちそうだ。

　どうやら自分の名前を呼ぼうとしているらしいと察したリェンは苦笑した。

「リエン・ドレングスンだ。……おまえは？」

続く……
かもしれない☆（＾＾；）

http://85358.diarynote.jp/201008260756098920/　に続きました☆

編集する

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2010年8月24日12:20
あぁ～……☆
なか５行ほど、服装についての描写を入れとくはずだったのに、書くのをすっとばしてしまった……★

内容も情景も、ちゃんと頭に入っているし、文章も断片的に浮かぶ（思い出せる）のに、これだけ暑いと、もう、「書くという気力」のエネルギーが、雲散霧消してしまっていて、発生しない～……★★★

ので、また明日にでも（覚えてたら）書き足しましょう……☆★

Going Home ３2010年8月26日

Going Home ３
2010年8月26日 連載 コメント (1)

http://85358.diarynote.jp/201008240832262727　の続き。
（まだちょっとメモ。）

「リ＝エン・ドレングスンだ。……おまえは？」

「……うわ、その声っ、……ほ、ホンモノ……ッ？……!?!?」

　さらに何秒かのあいだ深紅色の顔で口をあけたりしめたりしていたが、突如、正気にかえったらしく、ガタンと音を鳴らす勢いで椅子を蹴り、慌てて立ち上がって敬礼の姿勢をとった。

「……し、失礼しました分団長殿ッ！　小隊長、カィルアン・ウェ／トゥワ＝シンホァです！　この２年間は退役してましたッ!!」

　声が緊張と動転ですっかり裏返っているが、基本の音程が低めであることからすると、少なくとも純粋女性体というわけではないらしい。
「へぇ？」
　リェンは興味を感じたふうに片目をすがめて、再度その彼を眺めおろした。

　リステラス銀河軍、と通称される（正式名称はもっと長たらしいのだが）組織はまず何種類かの軍学校や軍予備校から始まり、卒業すると〈訓練兵〉（俗称は〈新人〉）という肩書きを得て後方勤務部隊に配属される。そこで実務と訓練を繰り返しながら特になにごともなければ一年で〈班員〉と呼ばれ、二年で〈副班長〉の役に就く。そこで今度は新人を指導する先輩としての役を果たした後、平均的な指導力ありと認められれば〈班長〉として構成員五名（新人一人、班員二人、副班長一人。班長である本人一人）をまとめる立場になる。この〈班長〉の任期を終えるまでが平均五～六年で、ここまでは原則として前線（実戦）に出されることはないという暗黙の不文律があって、しかも班長を勤め上げれば一応の退職金と、些少だが軍人年金が出る。
　ゆえに、ここでまとまった金額を手にしたうえで実戦部隊勤務に出される前にさっさと転進して民間の企業や学業にもどる、そういう通称〈短期兵〉とか〈出稼ぎ野郎

〉とか、あるいは〈腰掛け軍人〉などと呼ばれる最初から退役めあての隊員が、数の上では最も多いのだが。

　カィルアン・シンホァと名乗った目の前の人物は、標準的に判断される外見年齢からはせいぜいその〈班長〉あたりまで勤めたかどうか、へたすればまだ新兵なのではないかという、若いというか未熟というか、悪い意味で勢いだけが取り柄のような、まだ危なっかしいような印象しか、受けなかったのだが。

　小隊長、と名乗るからには、少なくとも軍歴十年以上、二十五名の隊員を統率するの能力はある、ということになる。しかも、リェンのことを〈分団長〉と呼んだ。それはつまり、かつて、２年前までは、あの最前線にいて、なおかつ生き残った、ということだ……？

「あいにくだが今は分団長でなく中隊長だ。例の件で降格されまくったからな」

　ニヤリと嗤って訂正を主張すると、小隊長は即座に言い返した。

「あれは快挙でした……ッ!!」

　http://85358.diarynote.jp/201008270858341759/　に、続きました☆

編集する

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2010年8月28日14:34
＞カィルアン・ウェ／トゥワ＝シンホァ

　うっかり１５年前に書いた初期設定資料を読み返しちゃったんで、主役のかたわれの名称（偽名ｗ）を修正しました☆

Going Home ４　（追加修正をちょこちょこ。）　2010年8月27日

Going Home ４　（追加修正をちょこちょこ。）
2010年8月27日 連載 コメント (3)

http://85358.diarynote.jp/201008260756098920　の続きです。

（だからまだメモ（？下書き／殴り書き？）だってばッ☆（＾＾；）”）

（とか言いつつちょこちょこと直し入れ中、＠２０：３８～．）

「あれは快挙でしたッ！　オレだって機会があれば殴りたかったっ!!」
　よりによって全銀河公開生放送での星腕方面軍司令官職への昇進叙任式典とそれに続くはずだった戦勝祝賀会場のその場で、第三次紛争出兵開始の総責任者であった銀河軍務総監（文官）を全力で殴り飛ばして半死半生の目に遭わせ、全銀河軍兵士たちの大喝采と軍上層部への激しい抗議の声があがり続けるなか、長期営巣入りと公開弾劾裁判のあげくにあることないこと誹謗中傷と毀誉褒貶を並べ立てられて複数の罪名を着せられて、極刑と除隊だけはなんとか免れたものの前代未聞の派手な降格処分を受けた。その件を初対面の部下から全面的に賞賛されては、リェンは苦笑するしかない。
「おまえはあの時どこにいたんだ？」
　カィルアンと名乗った少年（青年？）の顔が、しゅぅと音をたてて縮むかのようにうなだれた。
「オレの隊は第７区でした。……友人が、８区にいて……」
　８区といえば〈全滅〉戦区だ。隣の７区とて生還率はかなり低い。生きて本地に戻るためには、相当過酷な戦闘を強いられたはずである。
「そうか……」
　どうやら見かけの子どもっぽさとは裏腹に、かなり中身は違うやつらしいと認識を改めたあたりで、背後から聞き覚えのある……リェンにとっては聞き慣れた、とても懐かしい声がした。

「分団長！」
「司令官殿っ!!」
　意地でも旧階級で呼ぶ副官たちのあいかわらずぶりに破顔しながら振り返る。
「ジョイス！　ラズ！　……元気だったかっ……？！」

　親しげに名前を呼ばれた二人のうちの、一人はものすごい勢いで突撃というかまっすぐに突進してきて、分団長と呼んだ相手にどかっとばかりに飛びつき抱きつき、「ぅお～、ひさしぶり～っ！！」などと叫んで笑いあいながら、お互いにがしがしと肩や背中を叩き合う。

　もう一人は、戦友たちを眺めてにこにこと笑みながら近づいてきて、半歩手前で立ち止まると、ぴたりと、しかしちょっと茶目っけのある表情で、敬礼の姿勢をとった。
（銀河軍式の、右手の拳を左の胸に当てる敬礼が、こうも優雅にはえる軍人も、ちょっと珍しい……。）

「おひさしぶりです。お変わりなさそうで何より」
「あぁ、おまえも相変わらずみたいだな」
「途中で合流できるかと期待していたんですが一緒の列車ではなかったですよね？　夜明け前の便で着いてしまったんですか？」
「いや、俺は昨晩着いて隣の町に泊まって、ここへは徒歩で裏門から入って来たんだ」
「相変わらず用心深い……」
「なにしろ、とにかく、色んな連中が待ち伏せとかしてつきまとって来るんでなァ……」
　リ＝エン・ドレングスン旧分団長はひさしぶりに本音で話せる相手に出会えて、無意識のうちに甘える気持ちが出て、ぼやいた。
「色んな連中って？」
　問いをはさんだのはまだ肩に抱きついているジョイスのほうだ。

「記者とか突撃取材とか、盗撮者とか、自伝を書けとかいう出版社とか？　ありとあらゆる業界からの宣伝番組出演依頼の代理人とか、さらにありとあらゆる業界からの転職勧誘の代理人とか……、ただの熱狂的なファンだとか、誘拐して拉致監禁飼育しようとか試みる偏執狂的な自称ファンだとか、逆恨みで復讐とかいって襲いかかってくる馬鹿とか、暗殺者とか……
　いっぺん抱いてくれとか叫んで勝手に抱きついてきやがる色ボケ女とかも、何人かいたなぁ……」
　指おり数える勢いでまとめて愚痴り倒す。

「それはまた……」
　絶句してから「ご愁傷様です。ずいぶんご苦労なさってたんですねぇ……」としみじみ本気で同情してくれるラズラエルと、

「あ、最後だけはおれが引き受けてやってもいいけど」
　まぜかえすジョイスとで、反応が分かれた。

「ところで、こいつは？　またなにか拾って来たのか？」
　リェンの肩に肘をついて、その肘に自分の顎をのっけたジョイスが、その視線の先で固まっている〈小さくて若いの〉を指さす。

「いや、たまたま一番乗り同士だったんだ。カィルアン・シンホァ小隊長。７区にいたそうだ。」
「７区に？」
　ラズラエルが少し不審そうな表情で、そのずいぶんな童顔を一瞬のあいだ見すえた。
「やっぱり驚くよな？」リェンが苦笑する。
「いえ、そうではなく……。失礼した、カィルアン小隊長。ラス=ラ=エル・スィリンです。現在の階級は分団長ですが、このひとが降格されているあいだは決して私のことを階級で呼ばないように。」
「あ、はいッ」
「右に同じ～。ジョイフル・シンシンだ。よろしくな。」
「こいつが〈ライフル・シン〉だぞ、知ってるだろ？」
　リェンが嬉しそうに補足する。銀河軍内で彼ら三人を知らないやつがいたらモグリだ。

「一番乗りって、おまえさんも裏から歩いて来たのか？」
「いぇ、あの……」
　カィルアンは再び赤面して口ごもった。

（時間切れなので、あしたへ続く……☆）（@０８：５８）

http://85358.diarynote.jp/201008300112046765/
に続きました☆　）@2010.08.30.,01:17）

編集する

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2010年8月27日21:43

「カレーの市民」（「視点不統一」）になってしまっていたので、下の２カ所は割愛☆

＞（そんな彼の表情の変化に、取り残された小隊長は見惚れてしまってしばらくのあいだ陶然としていた。）

＞（「あ、いいなぁ……」とカイ・シンホァは小さく呟いて羨ましそうに見ていた。）

　それにしても。

　つい一昨日まで、ラズラエルもシンシンも、私の脳内にはまだカケラも存在していなかったぞッ?!

　いきなりフルネーム名乗って全キャラ設定自分で背負って、ハナシに乱入してきやがるんじゃな〜いッ……!!

　！！！！ｗ（＾◇＾；）ｗ！！！！

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2010年8月27日22:12

　あ★　う〜ん……★（ーー；）★

「相変わらず」って単語が３箇所も出てくる……★

　けど、うまく推敲ができなかったんで、今日はもうギブアップ★）

　@２２：１１☆（＾＾）☆

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2010年8月28日14:41

　暑くて続かねぇ★

　今日は修正のみにて。

　@１４：４１★（ーー；）

Going Home　５　2010年8月30日

Going Home　５
2010年8月30日 連載

http://85358.diarynote.jp/201008270858341759　の続きです。

「で、一緒に一番乗りってことはおまえさんも歩いて来たのか？」
「いぇ、あの……」
　カィルアンは再び赤面して口ごもった。
「オレはその、招集の日付を間違えて、昨日、着いちゃったもんで……
　昨晩はここの面会者室に泊めてもらってました……」
　かりにも銀河軍小隊長たるもの、ありえないミスだ。
　作戦行動中だったら全隊の命にかかわる……。
「おいおい！」
　ジョイスが遠慮なく吹き出した。

「すいません。退役してたもんで、ちょっと民間ボケしてて……」
「それにしても民間人だって時刻はともかく招集の日付はふつう間違えないでしょう？」
「それが、銀河標準日月表も見れないような田舎でのんびりしてたもんで……。本数の少ない辺境便をむりやり乗り継いでるうちに、時差計算がちょっと混乱しちゃって……」
「まぁ、俺たちだってここまで来るのに片道四十日はかかったけどな」
　ジョイスがぼやく。
「そんなに遠くに左遷（とば）されてたのか？」リェンが顔をしかめる。

「それでもその四十日間、こちらに着けばあなたに会えると思えば狭苦しい船倉暮らしも苦にはなりませんでしたよ、ジョイスがとにかく鬱陶しかったことを除けば。」
　ラズラエルが涼しい顔のまま、なんだか含みの多いことをいう。
　残りの二人は一瞬のあいだ顔を見合わせて、あえて反応はしないでおこうと目線で了承して、話を戻した。

「おまえさんそんなんでよく再志願なんかする気になったなぁ？」
「再志願？　……いいえ？」

　カィルアンの大きな紫水晶の眼が、さらに大きく丸く、きょとんと見開いた。
「そんなの、してませんけど。」

「え？」
「どういうことだ？」
「どういうことだって、どういうことですか？？」

「われわれ現役の銀河軍員は、どこへだろうと通達一本で異動を発令されますし、拒否権もないですが」

「いちど退役した者を、本人の再志願申請なしに招集するなんてことは、ありえないぞ……。基本軍令に反する。」

　リ＝エン・ドレングスン銀河第三腕方面軍司令官（元：在籍１分弱）が、高い鼻梁の上で薄い金色の眉根を険しく寄せて、言った。

（たぶん明後日ぐらいに続く……☆）

（設定資料）

《特Ａ会議》とは。

《特Ａ会議》とは。

《リステラス》（我天地）の憲法上には記載されていない、あくまでも非公式なもの。

もともとは超天才である "実験体" 同士が、暴走して内紛を起こさないようにという配慮で作られた、ネットワーク的な根まわし組織であった。

ここで意見がまとまらないと、 "千日会議" と呼ばれてその政策は棚送りになる。

ここでの決定が《我天地》連合会議でくつがえされる事は、まず皆無であると言っていい。

事実上の最高評議会である。

《首都惑星》上の《円卓都市》にて、ほぼ連日開催。

議題は日替わりで、首都圏常駐の〈特Ａ〉１０００～２０００人の他、《我天地》全域からのアクセス者で、最大５０００人規模になる。

「試験くらい、受けさせたら、どうです！」

「試験くらい、受けさせたら、どうです！
　これは法律で保障された権利であり、義務なんですよ！？」

　　「差別」（区別）される側が、その扱いを、
　　「努力からの解放」と受け止めて、
　　「喜んで」受け入れてしまった時、

　　果てない闘いよりも、見せかけの平和を、選んだ時に、

　　その社会の制度は固定化し、見えない鎖となって人々を…

　　"特権階級" に座した者をも、もろともに…

　　　しばりつけるのである。

（借景資料集）

※　中身は随時、増殖してます。

↓

【滋養 興想】　『ホーム シック』 緩和剤…ｗ　（ 音 薬 匣 ）

http://85358.diarynote.jp/201610051350561955/

Someday I will REFIND YOU.　2015年1月30日

Someday I will REFIND YOU.
2015年1月30日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (2)

（またもや承前でｗ）

この曲は、とっくに「勝手に頂戴済み」ｗ

https://www.youtube.com/watch?v=LatorN4P9aA
Journey - Separate Ways (Worlds Apart)

https://www.youtube.com/watch?v=twC6FvDubLk
Journey - Just the Same Way

https://www.youtube.com/watch?v=atxUuldUcfI
Journey - Any Way You Want It

＞http://76519.diarynote.jp/200605242334530000/

これ増えてるからねｗ
＞http://85358.diarynote.jp/201501300914289674
「聴くべき人」は、聴いておいてねｗ

フロはいって寝ますぅ～…☆

p.s.I love you.
https://www.youtube.com/watch?v=vg5vziU-qls
Journey - Feeling That Way

検索【脱戦】結果ｗｗｗ　**2015年1月23日**

検索【脱戦】結果ｗｗｗ
2015年1月23日 リステラス星圏史略　（創作）

https://www.youtube.com/watch?v=PckOLPgUtBA
Jahcoustix - On The Way

これはコレ用にもらうｗｗｗ
＞http://76519.diarynote.jp/200605200011070000/

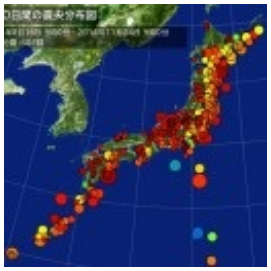
さらに「寄り道」ｗ
https://www.youtube.com/watch?v=ZOwzkoDJDi4
Culture Club That's The Way

https://www.youtube.com/watch?v=0RpLTxayX7k
That's The Way

「大物」釣りあげすぎｗｗｗ
https://www.youtube.com/watch?v=GZVUf5r0M7E
Silly Fools & Ebola One Way Concert (2008) Disc1

留縄居！『RUN　AWAY』（るん あ わぃ）　2014年11月24

留縄居！『RUN　AWAY』（るん あ わぃ）
2014年11月24日 リステラス星圏史略　（創作）



まぁ聴け私！

https://www.youtube.com/watch?v=ruE7p7Al_Mc
"安室奈美恵 Don't wanna cry..."

https://www.youtube.com/watch?v=L88wQ8iSff0
Namie Amuro - Chase the Chance

https://www.youtube.com/watch?v=s86K-p089R8&list=RDs86K-p089R8#t=4
Bon Jovi - Runaway

https://www.youtube.com/watch?v=hWiki8UOlmY
[Alexandros] - Run Away (MV)

https://www.youtube.com/watch?v=qgfv5x4vnjY
Galantis - Runaway (U & I) [Official Audio]

https://www.youtube.com/watch?v=49TkwEKSOvw
谷村新司　昴 すばる1991

https://www.youtube.com/watch?v=3I1hs6BSnAg
中島みゆき「恩知らず」ミュージックビデオ（Full ver.) [公式]

https://www.youtube.com/watch?v=ucE-WsXNKGs&index=8&list=PLJZzndOKd4tv1GgtfARoejGE54DzF56X4
銀の龍の背に乗って　中島みゆき　【cover】

別件ＢＧＭめも。**2015年6月15日**

別件ＢＧＭめも。
2015年6月15日 リステラス星圏史略　（創作）

別件ＢＧＭめも。

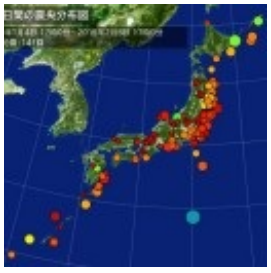
https://www.youtube.com/watch?v=LUB6zCGrD_E
【歌詞つき】GO WAY GO WAY (live ver) / FoZZtone[official]

これ用ね。（＾＾；）
http://76519.diarynote.jp/200605200011070000/
『ロング・ウェイ・ホーム』（……仮題……？？）

http://85358.diarynote.jp/201008230806215037/
Going Home　act.1

just LOVE SONGS to BELIEVE MY WAY..　2015年2月3日

遠距離＋身分差＋壁だらけ。… just LOVE SONGS to BELIEVE MY WAY..
2015年2月3日 恋愛 コメント (10)



（いかん。ハマったｗ　この遊び面白いな～ｗ　…組み合わせ思いつくと、貼らずにいられない…）
（※こっちにも一曲追加しました。http://85358.diarynote.jp/201502021952321136 ）

https://www.youtube.com/watch?v=hCuMWrfXG4E
Billy Joel - Uptown Girl

https://www.youtube.com/watch?v=zMoT61znNtg
DOWNTOWN BOY 松任谷由実　初音ミク

https://www.youtube.com/watch?v=4Ca1EJQ1bXE
WANDS ／世界が終るまでは

https://www.youtube.com/watch?v=kUV3LH9GRa8
Orange Range - Kizuna

https://www.youtube.com/watch?v=odcDaNOfRVM&spfreload=1

MONGOL800 Love Song

https://www.youtube.com/watch?v=8m9V5mLxB_g
Get Wild and LOVE TRAIN -EXTENDED MIX - TM NETWORK -

https://www.youtube.com/watch?v=_hVaRiOPZLE
ブルーハーツTRAIN-TRAIN

https://www.youtube.com/watch?v=DRtY-Ndlrwg
【Just One Victory】single 7’ version -TMN-

https://www.youtube.com/watch?v=m6iHnuyHmho
琉球愛歌　[MONGOL800]

https://www.youtube.com/watch?v=XfxaWWk7t1I
花　ORANGE RANGE

https://www.youtube.com/watch?v=ia1HWtcQLwQ
荒野より / 中島みゆき [公式]

https://www.youtube.com/watch?v=hNYSQDbD4v0
My Way - Def Tech

編集する

コメント

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日12:52
…自分で並べておいて、通して聴き直したら、我ながら完璧だぁ…っ！
…o（ＴｏＴ）o…っと、感動してしまいましたｗ

しかも、「荒野より」で終わるつもりだったのに…

最後の「シメの一曲」は、今日、作業終了のつもりの寸前に、

「偶然」神様から
教えてもらった音楽なのでした…ｗｗｗ

　ｗ（＾ｗ＾；）ｗ

中学～高校の頃、毎晩のように夢で視ていた

「私は被災地のはずれで
　遅ればせながらヨロヨロと避難していく
　命ぎりぎりの人たちに、
　一瞬の慰めと励ましとサツマイモを提供し続けて、

　そろそろ最後の一人が逃げたかと思う頃に
　リュックを背負って旅立つ」という、

ビジョン…

どうやら「ふかし芋」は「魂の栄養源」というメタファーだったようですね…☆

「きみならできるから、がんばれ！」

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日12:53
栄養源ていうか…「救荒作物」…？

サツマイモ。

（もともと飢饉の餓死を食い止めるために日本に導入された滋養救貧作物）。

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2015年2月3日12:56
GO TO KENJI is never die ！

I know your smile and
believe your soul and luck !

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日13:32
「太陽風 高速」外出禁止！

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日16:55
結局、音楽を聴いて貼って、
ツボ押しながら惰眠を貪る以外は何もしないで終わる３連休の２日目？　σ(^◇^;)。。。

まぁ丸二日も部屋から出ずこんなにのんびりしたのは一昨年の９月以来かも？だから、まぁ、いいか…┐(’～`；)┌

魂と魄には良い静養になってるので、「あと１００年は生きて火星と木星まで行く！」ためのメンテナンス時間ということで…

(^。^;)

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日16:57
羅臼は凄いらしいが、
札幌は静穏です。(^_^;)

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）
2015年2月3日17:11
札幌マイナス３℃。無風。
ふと外界を確かめようと、
開けた玄関の真ん前、真東に、
見事に真ん丸で怖いほど鮮明なレモン色の満月。

ほんの数分前に北東のアリューシャンでＭ５が２連発。

ヽ（・＿・；）ノ

…なんかクルかなこれは…

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2015年2月3日17:32

「ISISは元々CIAのほうが多い」

ツイッタ。もはや何が何だか…

(・ω・;)(;・ω・)

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2015年2月3日17:33

「ISISは元々CIAのほうが多い」

ツイッタ。もはや何が何だか…

(・ω・;)(;・ω・)

うわ、ＤＮＡ書き込めないなう

17時33分！

霧木里守≒畑楽希有（はたら句きあり）

2015年2月3日17:39

「放射線牛乳のその日にひとつ目の癌細胞が生まれた」

ツイッタ。

http://85358.diarynote.jp/201501231804046938/

検索【脱戦】結果ｗｗｗ

2015年1月23日 リステラス星圏史略　（創作）

https://www.youtube.com/watch?v=PckOLPgUtBA
これはコレ用にもらうｗｗｗ
＞http://76519.diarynote.jp/200605200011070000/

さらに「寄り道」ｗ
https://www.youtube.com/watch?v=ZOwzkoDJDi4
https://www.youtube.com/watch?v=0RpLTxayX7k

「大物」釣りあげすぎｗｗｗ
https://www.youtube.com/watch?v=GZVUf5r0M7E

リステラス星圏史略
古資料ファイル
８－１
『 LONG WAY HOME 』

http://p.booklog.jp/book/112669

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/112669

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト